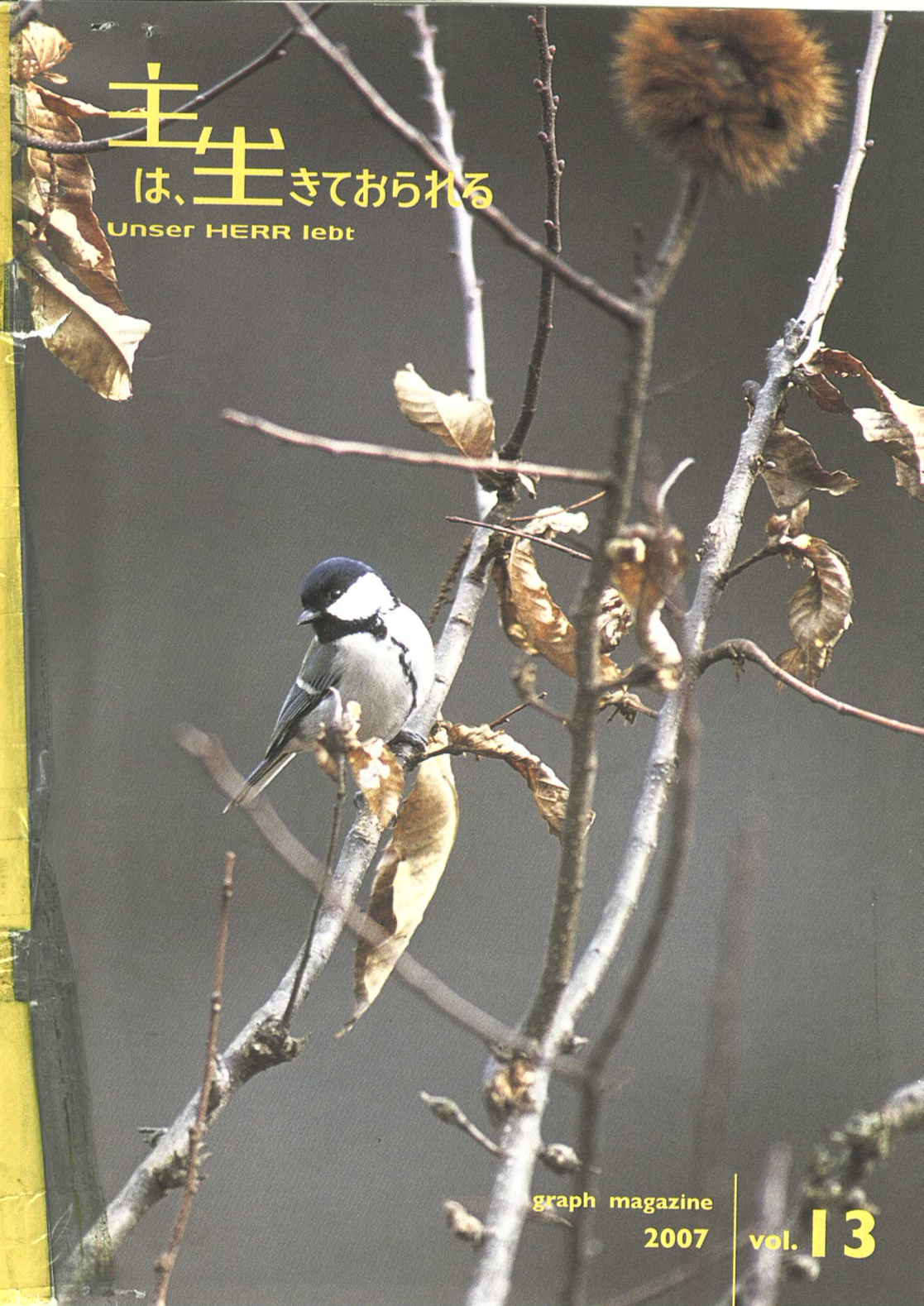
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



graph magazine

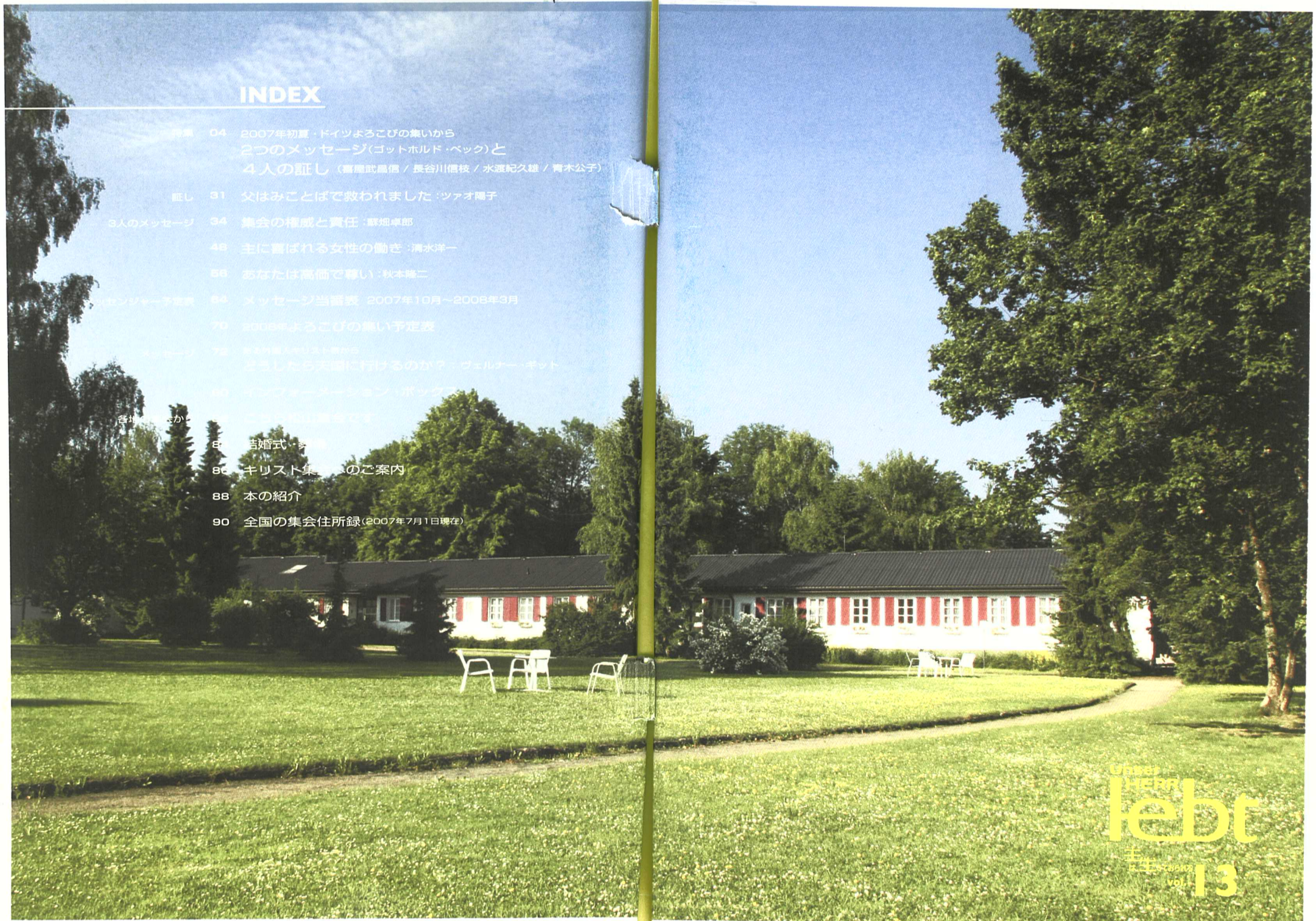
2007

vol. 13

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol. 13 | 定価100円（本体95円）



INDEX

特集 04 2007年初夏・ドイツよろこびの集いから
2つのメッセージ(ゴットホルド・ベック)と
4人の証し(喜屋武晶信 / 長谷川信枝 / 水渡紀久雄 / 青木公子)

証し 31 父はみことばで救われました:ツァオ陽子

3人のメッセージ 34 集会の権威と責任:蘇畑卓郎

48 主に喜ばれる女性の働き:清水洋一

56 あなたは高価で尊い:秋本隆二

センジャー予定表 64 メッセージ当番表 2007年10月~2008年3月

70 2008年よろこびの集い予定表

メッセージ 72 [illegible]
どうしたら天国に行けるのか?:ヴェルナー・ギット

80 インフォーメーション:ボックス

各地[illegible]から [illegible]

84 結婚式・[illegible]

86 キリスト集[illegible]のご案内

88 本の紹介

90 全国の集会住所録(2007年7月1日現在)

Unser HERR lebt
主 vol.13



2007年初夏・ドイツよろこびの集いから

2つのメッセージと4人の証し

恒例の「ドイツよろこびの集い」が2007年も、まず初夏の6月、2回にわたって開かれました。日本からの参加者はAグループ（6月6日―13日）113人、Bグループ（14日―21日）103人。緑豊かな南ドイツの高原、ミヘルスベルグに滞在して、たくさんの聖書のメッセージ、証しを聴き、またたっぷりの交流の時も与えられて、霊的に満たされた日々を過ごしました。AB合わせて15回の集会の中から、日曜日（10日と17日）にアイドリンゲンの施設（ディアコニッセン・ムッターハウス）で語られた2つのメッセージと4つの証しを紹介します。

主は、私たちが
自分をゼロの状態に置いたときに、
ご自身を啓示してくださいます。

ゴットホルド・ベック














今日、私たちが、こうして再びアイドリンゲンのムッターハウスに来られたことをほんとうに感謝します。出発の数日前までの私の病状は、ドイツに行けるかどうかわからない状態でしたが、主の憐れみにより、医師の許可が下りました。毎週お送りしているEメールを見てくださる方々は、私たちが今年どのような状況にあったかをご存知だと思います。

次のような詩があります。

「何が起きても、こころよ、静まれ。
神はあなたを祝福したいと思っておられる。
今日も神の一日。
新しい朝に、夕に、あなたは神のもとで安らぎ、見守られている。」

この詩を自分でそっくり体験できるのは、大変な恵みであり、特権です。

今回の私の発病は突然でした。三年前にかかった白血病が再発し、ほかにも病いが重なり、予期せぬうちにどんどん重くなりま


















このメッセージは、2007年ドイツよろこびの集いAグループが、6月10日、アイドリンゲンのムッターハウスを訪れたとき、ベックさんが集会でドイツ語で語られたものを日本語にしたものです。

した。その頃は、集会の予定が山のように積もっていました。連日、二三ヵ所で家庭集会があり、多くの方々との交わりの約束がありました。せめて月曜日だけは休みにしたいと思っていても、次々に葬儀が入りました。主は、私たちが健康である限り、ペースを落とすことを望んでおられないようです。

病気の再発によって、私は動き回ることができなくなりました。数ヵ月前から結婚式の約束もあったし、よろこびの集いの計画もびっしりと入っていたのです。私は今年に入って3回入院しましたが、今回、ついに自宅療養になり、感染を避けるため、「できるだけ人との接触を避けるように」と医師に命じられました。化学療法によって免疫力が大幅に下がっていたからです。

こんな状態の中で主が私に示されたのは、「時には、お前も病気になっていいのだよ」ということでした。それまでにも私は、病気を与えられたことの意味をいろいろと考えま

した。入院した時には、よく、次のように考えました。「私が入院したのは、治療のためというよりは、むしろ主イエス様を、医師や看護士の方々に証しするためなのだ」と。どうかここにおられる皆さまも、蒔かれた多くの種が発芽し、実を結ぶように、ともにお祈りください。

病気は、ひとつの危機ですが、療養期間中は「強制的な休息」であり、その間は、心の浄化と成熟のための得がたい時間となります。つまり、心のふるさとへの道標を求める時間です。誰もが切望すべき、好ましい状態ではないでしょうか。フランス人の数学者であり哲学者でもあるブレーズ・パスカルは、次のように祈りました。

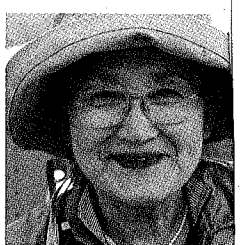
「主よ、あなたのみこころのままに行なってください。私は、健康も病気も、いのちも死も、あなた様に願いません。私の健康も病気も、いのちも死も、ただあなた様のご栄光と救いのためにご支配ください。私にとって何が益であるか、あなた様だけがご存知です。あなた様は、私の主ですから、どうかみこころを行なってください。みこころのまま、与えてください。取ってください。私は一つのことだけを知っています。あなた様についていくことが最善であることを。

私にとって、あなた様を侮ることは損です。私は、健康か病気か、富か貧困か、そのどちらが益になるのかわかりません。この世のことのすべてについても何もわかりません。それらを決めることは、人間の力を超えています。私にとって何が益であり、何が損であるかは、私には隠されています。それは、主よ。あなた様だけの秘密です。私はそれを解明しようとは思いません。ただ、祈り求めるだけです。」

ある集会での奉仕で大いに祝福されていたフックス・フェルディナンドという方は次のような詩を書きました。

「山々を創られた神よ、谷々を創られた神よ、深淵を創られた神よ、天におられる主である神よ。あなた様のお導きは、決して間違うことはありません。すべてのことを正しく司られます。
小さい者の神よ。弱い者の神よ。無に等しい者の神よ。あなた様は悩みの中にあっても主を賛美できるように助けてくださり、私たちが神の子供であることを知らせてくださいます。不安の谷間で失望している者に新しい朝を知らせてくださり、私たちにとって足りないものは何もありません。
力と権威の神よ。私が力を失って何もできなくなったとき、あなた様の御手が私を支えてくださいます。永遠の神よ。そのとき、私をあなた様のところに引き上げてくださいます。私はあなた様を、喜びをもって賛美します。私の歩みが祝福されますように」。





アイドリンゲン姉妹会の創始者であり、私たちの信仰の母であるクリスタ・フォン・フィーバーンは、次のように言いました。

「地上で私たちの前に置かれている日々を思うとき、慰めと喜びがあります。主の恵みと守りの豊かさを喜び、いつも確信することができます。」

長年私たちは、信仰に導かれた人々の霊的な成長を祈ってきました。私たちは、「彼らが私たちの助けなしに成長できるだろうか」と、つい考えてしまいます。でも実は、私たちは「いてもいなくてもよい存在」であるべきなのです。そして今回、この病気を通して、つまりスイッチが切られた状況の中で、「私たちなしでも大丈夫」ということがはっきりと示されました。

キリスト集会の兄弟姉妹がたは、私が倒れている間、以前よりも積極的に関わってくださり、以前よりも多く祈ってくださり、よろこびの集いや家庭集会、洗礼式、結婚式、葬儀、そのほかのことは、すべて主を中心に着実に進められていきました。また、私たちは改めて主によって教えられました。兄弟姉妹が互いに必要とし、愛しあうところには、未信者の方も求めて来られるということを。主が、









頭として、権威として、認められ望まれるところでは、主に属する人々を主が用いられます。

あなたが何をなすべきなのか、どのように、また、いつすべきなのかを、主に尋ねてください。それは、私、あるいは私たちの奉仕を、主が助けてくださるからということではありません。すべては主のなさることです。私たちが仕えさせていただけるのは、ただ主の恵みによるのです。なぜなら、主は私たちなしでも、おできになるのですから。

主イエス様が、私たちと全く異なっておられるという事実。それを私たちは知りました。

主イエス様の弟子たちも、当時そのことを体験しました。彼らは主イエス様をほんとうには理解できませんでした。カナの婚礼で、イエス様の母は言いました。「ぶどう酒がありません」と。イエス様の答は、「あなたはわたしと何の関係があるのでしょう。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」(ヨハネ2・3,4)

たびたび、弟子たちは思わざるをえませんでした。「イエス様の考えは私たちとは異なっていて、私たちには理解できない」と。

もし私たちが、イエス様から見て、どれだけ多くの間違いをしでかしているか、それがわかればほんとうに幸いです。主イエス様は言われます。「わたしとあなたとは考えが異なります。早く諦めて、あなたの計画をそっくり手放しなさい。あなたから出るものはす

べて的外れで、わたしがしようとすることの邪魔になります。」

主イエス様と私たちの間には、根本的な違いがあります。イエス様だけが、いつも父である神のみこころにかなうお方です。イエス様が私たちを完全にご支配なさったとき、初めて、まったく私たちと異なるお方、主は、私たちをお用いになることができるのです。私が何かを考えても、それは大切ではありません。私の考えは主の邪魔になります。主イエス様と私には何一つ共通するものがありません。この違いはいつまでも残ります。主の前に、引けを取らないものなど何一つありません。自分の努力はすべて的外れです。徹底的に自分に絶望した者だけが霊的に先に進めるのです。






この世は、嘘、偽り、欺瞞に満ちています。人間のもっとも奥にあるのは偽りの性質です。しかし、イエス様は真理そのものです。他の人が何を考え、何を言うか、それは重要ではありません。人間の中に真理はありません。人間の理性や意志、また感情は、真理ではありません。サウロは信者を迫害しながら、神に仕えていると確信していました。私の中におられるイエス・キリストは、私自身とまったく違うお方です。私が肉的あるいは霊的にどうであれ、それはどうでもいいことであり、内住されるイエス様は、私とはまったく違っておられるのです。

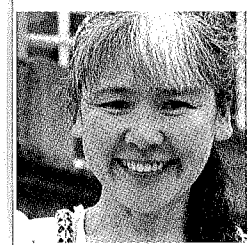
私がどういう者かではなく、主がどういうお方であるのか。

私たちの意見は簡単に変わります。しかし、私たちの内におられるイエス様は変わることがありません。なぜなら主イエス様は、私とはまったく違うお方だからです。私はイエス様の中に安らぎ、すべてをイエス様にお任せします。主の中に留まりなさい。主の中には、休息、平安、自由、守りと安全があります。それらをイエス・キリストが私たちに与えられました。すべてを私たちは持っているのです。主が、私たちにとって、すべてとなるべきです。信じる者は、自分自身の中には何も求めず、すべてを無にし、ただ主に頼るべきです。

私たちの主は、悲しみ、悩み、苦しみ、痛みを通してのみ、ご自身を啓示してくださいます。ですから、私たちには悲しみ、悩み、苦しみ、痛みが必要です。だから主は必要なときに、それらを送ってくださるのです。

イエス様に仕えた使徒たちは、教義や規則、方法などについて論じあうことはしませんでした。ただ主イエス様のことを告げ知らせ、そのせいで時には絶望的な状況に置かれました。彼らは脱出の道を見失い、イエス様に叫びました。すると、イエス様はすぐ、ご自身を現わされました。脱出の道のないどん底を経験することなくして、新しい啓示は得られません。私たちに助けを与えるものは、律法や教義ではなく、ただ、イエス様の新しい啓示なのです。主の中にのみ、光といのちがあります。

いつも御霊に満たされていたイエス様は、ご自身の考えを否定なさいました。「わたしはどうでもよい。父よ、あなた様は何を望んでおられますか。わたしは何を語り、何をなすべきでしょうか。わたしの思いではなく、わたしの判断ではなく、ただあなた様のみこころ、あなた様の判断だけがなりますように。」




父である神の完全なご支配の下にあったイエス様のご生涯。

イエス様は、ご自分が目立たない存在であることを望んでおられました。十字架の意味するところは、自分の意見も、自分の主張も、すべて十字架に付けることです。日々、自分の思いや感情を、十字架の下に持っていかねばなりません。主が私たちの頭として、すべての決定権をお持ちです。

ここで、大切な二つのことをよく理解しましょう。

「主は私たちに対して、支配権、処分権を持っておられます」。

「主は私たちを、みこころのままに取り扱われます」。

主は、ご自身のご栄光で満たすことのできる「器」を求めておられます。そのためには、まず、私たち自身が死ぬ必要があります。死んで「自分で生きる」ことを止め、「神である主を無視して生きる」ことを止めるのです。そうすれば、大きく開かれた天、主のご臨在を体験できるでしょう。しかし、その前に、私たちの中には堕落しかないことを認めなければなりません。「私は何と哀れな者であることか。私は失われたものである。」とイザヤは言いました。「自分に死ぬこと」が、私に起こりうる最善のことです。

いかなる苦しみがあろうとも、すべてを主の御手から受け取るべきです。主が、すべての苦しみや圧迫から私たちを解放されるのは、私たちにとって必ずしも良いことではありません。パウロの肉体にサタンの使いであるとげを与え、打たせられたのは主でした。それはパウロが高慢にならないためでした。

「自分に死ぬ」ことによって、イエス様の「いのち」が見えてきます。イエス様にとっては、父のみこころだけが決定的でした。イエス様は、サタンから、家族から、弟子から、いろいろなことを言われましたが、それに左右されたり従ったりなさることは一度もありませんでした。イエス様にとっては、父である神、主の言葉、みこころだけが何より大事で

あり、すべてのことの決め手だったのです。

聖霊は、私たちからすべての自主性、すべての勝手な思いを取り除くことを望んでおられます。そしてその上で、すべての責任を負いたい、と望んでおられます。

イエス様は、ご自分では何もできないと語っておられます。「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」(ヨハネ14・10)

私たちは、主を愛しているけれど、どこかで自分自身の道をも愛しているのではないでしょうか。私たちは自分の思い、自分の行きたい道が妨げられることを嫌っているのではないでしょうか。主が自分の思う道と違う道に導こうとされると、失望したりしないでしょうか。私たちは自分で何かを手に入れたい、どこかに辿り着きたいと思うような者です。しかし、そうではなく、私たちとまったく異なったお方、主に似た者とならなければなりません。

主イエス様がすべてにおいて第一となられるべきです。

私たちは、主に完全に依存することが許されています。そしてそれによって、主の満たしにあずかることができるのです。満たしは主の中にしかありません。心の内におられるイエス様は、私たちと違った存在のお方です。ですから私たちは、自分自身を否定することによってのみ、満たしを体験できるのです。

多くの方々は、「自分の人生はすべてうまく行っている」と、自負しておられるかもしれません。しかし、突然行き詰まり、自分が間違った道を走ってきたと認めざるを得なくなる日が来るかもしれません。なぜそうなるのか。それは、主を見上げ、主の導きを祈り求めることを第一として生きてこなかったからなのです。

第1歴代誌13章には、次のようなことが記されています。ダビデは、主の契約の箱をエルサレムに取り戻すのは良い考えだと思い、改めて主のみこころを主に尋ね求めることをせず、契約の箱を車に載せてエルサレムに運ぼうとしました。しかし、契約の箱を汚れた手で押さえたウザは主の怒りに触れて死に、改めて主のみこころがどこにあるのかを怖れたダビデは、契約の箱を途中のオベデ・エドムの家に運びこみ、3カ月留まったのです。

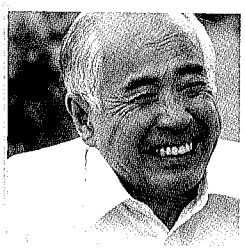
私たちにも良いと思われる考えがあるかもしれません。しかし、それが真に主のみこころに添ったものであるか、単に私たちの思い付きや思い込みに過ぎないかを、よく主に尋ねなければなりません。「主とともに歩んでいるかどうか」。これが一番大事なことです。

神の霊が働いておられるところには、いのちがあふれています。そういうところでは、主がどこにおられ、どのように働こうとされているのか、また、私たちに何を求めておられるかが、はっきりとわかります。何が起きようとも、常に主のもとに身を避け、十字架の血潮の覆いに身をおくことが許されていることは、何という喜びでしょうか。

主は、私たちが自分をゼロの状態に置いたときに、ご自身を啓示してくださいます。

聖書にある通り、そのとき五千人の人々のためにパンを買うことは不可能でした。ある人は38年間病気で助かる望みなく、すべては絶望でした。生まれつきの盲人は、ものを見たことが一度もありませんでした。ラザロは4日間も墓に入っていました。このように、人間的な助けがまったく不可能になったときにだけ、主は介入されたのです。

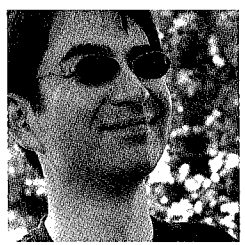
イエス様は、ご自身のご栄光のために役立つなら介入してくださいます。私たちのすることには何の価値もありません。主のご目的は、私たちの中に、また、私たちを通して、主がご栄光を受けられることです。私たちに何が起きようとも、それはどうでもいいことなのです。自分の力に拠り頼むのではなく、主のみこころを尋ね求めるならば、主は必ず働いてくださいます。





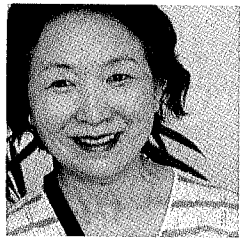





あなたがたは、
主の喜ばしい知らせを持っている。
それなのに、なぜ、
沈黙しているのか。

ゴットホルド・ベック




去る五旬節にアイドリンゲンで行われた若者の集いで、二つの文章が引用されました。まず、最初の文章は次のものです。
「イエス様は真実なお方です。役に立たない者の人生に対しても、イエス様は真実を尽くされます。イエス様は、私たちが知っていると思っているお方とはまったく違ったお方であり、私たちが勝手に望んでいるのとはまったく違ったお方です。主はみこころのままに、あなたの人生に介入されます。」(ハインツ・スピンドラー)

先週の日曜日にも、ここアイドリンゲンでお話したように、私たちの主は、私たちとは「まったく違ったお方」です。私たちが苦しい逆境を乗り越えるには、ただイエス様からの新しい啓示だけが役に立ちます。なぜなら、主の中にのみ、光といのちがあるからです。

聖霊にあふれておられたイエス様は、いつもご自分の考えを否定なさいました。「わたしはどうでもよい。父である神よ。あなた様は何をお望みですか。わたしは何を語り、何をするべきでしょうか。わたしの思いではなく、わたしの判断ではなく、あなた様のみこころ、あなた様の判断だけがなりますように。」
主だけが、すべての決定権をお持ちです。
イエス様は目立たない存在でおられたかったのです。十字架の意味するところは、自分の思いや感情を十字架につけてしまうことです。日々自分の思いや感情を十字架の下に持っていかなければなりません。主だけが私たちの頭として、すべての決定権をお持ちです。

次の疑問を、自分に問いかけてみましょう。

- 私はいつも、主のご支配の下にすべてを明け渡しているでしょうか？
- 私はいつも、主の思い通りに動かされているでしょうか？

主は、ご自身のご栄光で満たすことのできる器を求めておられます。私たち自身は一度死ぬ必要があります。死んで「自分で生きる」ことを止め、「主無しで生きる」ことを止めるのです。そうすれば、主のご支配、開かれた天を体験できるでしょう。

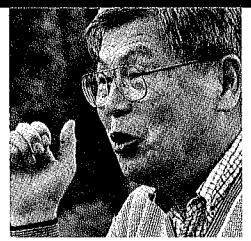
イエス様にとっては、父である神のみこころだけが決定的でした。サタンや家族、弟子たちから幾度も意見や提案を受けられましたが、その通りになさったことはありませんでした。ただ、父のみこころにかなうことだけが、イエス様の行動の決め手でした。

聖霊は、私たちのすべての自主性、すべての思いを取り除かれたいのです。その上で、すべての責任を負いたいと思っておられます。

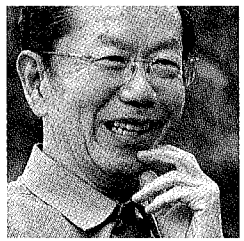
私たちは自分自身の思いを否定することによって、主の満たしを体験できるのです。
私たちは幸いにも、主に依存することが許されており、それによって主の満たしにあずかることができるのです。満たしは主の中にしかありません。心の内におられるイエス様は、とにかく、私たちとは違います。ですから、私たちは自分自身を否定することによってのみ、満たしを体験できるのです。

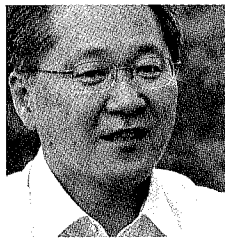
私たちにも良いと思われる考えがあるかもしれません。しかし、それが主のみこころであるか、私たちの思いであるかを、主に尋ねなければなりません。主とともに歩んでいるかどうかが大切なのです。主の霊が働いている中には、あふれるいのちがあり、主がどこにおられ、どのように働こうとされているのか、また、私たちに何を要求しておられるのかがわかります。何が起きようとも、主のもとにいつも身を避け、十字架の血潮の覆いに身をおくことが許されています。

神様は、ご自身の目標を達成するために、私たちをも参加させられるのです。
さて、若者の集いで語られた第二の引用は、次の文章です。
「神様は、ご自身の目標を達成するため

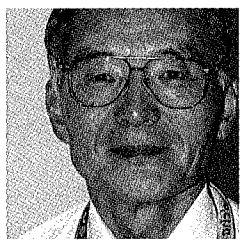



このメッセージは、6月17日、ドイツよろこびの集いB班がアイドリンゲンのムッターハウスを訪れたときの集会で、ベックさんがドイツ語で行われたメッセージを、日本語にしたものです。







に、私たちをも参加させられるのです。あらゆる国家、部族、民族、言語の人々が集って主を礼拝します。」(シドニー・ウィトブーイ)

私たちの使命は、イエス様を宣べ伝えることです。私たちの望みは、まだ救われていない人々がイエス様を知って救われることです。主への愛、そして失われている人々への愛ゆえに、私たちは「真理」の問題に関して、異説を聞き入れてはなりません。人々を地獄に行かせたくないからです。この世にある、いわゆる宗教というものは、人間を生ける神のもとにではなく滅びに導きます。ただひとり主イエス様だけが、ご自身が生ける神への唯一の道であると明言しておられます。

深刻な今の時代。主を信じきることだけが、問題を真の解決に導きます。

今の時代はほんとうに深刻です。イエス様を信じる者は、協力しあうべきです。しかし、その協力とは、すべてを犠牲にし、すべてを妥協して協力しあうことでは決してありません。聖書の真理を犠牲にした誤った超教派的な動きは、解決策にはなりません。ただ主イエス様を信頼し、信じきることだけが問題を真の解決に導きます。

たとえば、私たち主を信じる者は、次のような人々と交わることはあり得ません。

- 聖書を絶対的なものと考えない人々
- マリアや聖人、死者に向かって祈る人々
- 聖書に基づいた相談でなく、心理学的なカウンセリングを求める人々
- この世的な方法で、教会を繁栄させようとする人々
- ローマ法皇を、すべてのキリスト者の代表として認める人々
- 聖書の神とイスラム教のアラーを同等に位置付ける人々
- 集会の規律を時代遅れとして、受け入れない人々
- 罪や地獄について、もはや語らなくなった人々
- 神はすべての宗教の中にいる、と言う人々
- 人々の賛同を得られないので、神をもはや主とは呼ばない人々

(この項はフリーゲ氏によるドイツの教会の大会における発言)

- 神は、父でもあり母でもあるので、もはや主とは呼ばない人々
- イスラム教徒とともに祈ろうとする人々
- 洗礼を罪の赦しとして認識する人々





今の世の中は、神を認めようとしない社会になっています。不信仰と愛の欠如が蔓延しています。ヨーロッパの国々の憲法において、もはや「神」の理念はなくなってしまいました。罪を罪と呼べず、異端を異端と呼べなくなると、宣教も福音伝道も不可能になります。過ちと罪があって初めて神様の真理、義とあわれみが宣べ伝えられるからです。

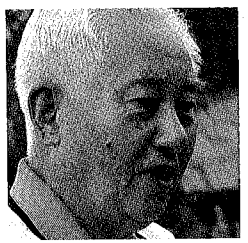
主は言われます。**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ 14・6)**

私たちは、主イエス様だけが真理であり、他には真理が存在しないということを、はっきりとこの世に向かって示さなければなりません。ともすると、聖書は、今の時代に向けた神の言葉として宣べ伝えられなくなっています。もはや真理は存在しないかのようです。

二つの異なった意見があります。一つ目の意見は、「間違いのない聖書のみことばに耳を傾け、現代の思潮から離れるように」と警告します。二つ目の意見は、「聖書批判を許し、現代の思潮と仲良くしよう」というものです。しかし私たちは、この終わりの時代において、次のことをゆるぎなく確信する者です。

「聖書のみ、イエス様のみ、恵みのみ、信仰のみ。」





「次の事実から離れることは不可能です。聖書の間違いのなさ。神である主イエス様。処女マリアからのイエス様の誕生。十字架上におけるイエス様による犠牲の贖い」。

ところで、南アフリカではいったい何が起きているでしょうか。神に関係のあることは憲法から除外されています。すべての宗教は同じ価値であるとされ、学校教育の中で、魔法や魔力の習慣が教えられます。堕胎が容認され、親が知ることなく12歳の少女が中絶することが許されています。

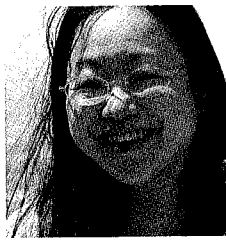
日本には、今日、プロテスタントの教会が7,961ヵ所あります。教会の会員が512,111人(人口の約0.4%)ですから、一教会あたりの会員は平均64人、そのうち日曜日の礼拝には約36人が参加するという計算になります。

ある日本の大きな教団に属する2000の教会では牧師が不在で、10年後にはさらに500カ所の教会で牧師がいなくなると心配されています。後継者が育たないのです。このような事実は衝撃的であり、信者の覚醒をうながします。

「ワタシは誰でしょう」という宣教の印刷物に次のことが記されていて、私はいまだにそれを覚えています。

「ワタシは地上のどのような軍勢よりも力強い。ワタシはどのような爆弾や大砲よりも大きな破壊力がある。ワタシはすべての戦争よりも多くの人間を殺す。ワタシは年々、多くの男女を片輪にしている。病気、長患い、そして死をもたらす。ワタシは子供も老人も、家屋敷をも見逃さない。何も与えず、すべてを取り去る。あなたはワタシのことを十分に警戒すべきなのに、ワタシのことを忘れている。『ワタシ』とは、あなたの最大の敵、『無関心』である。」





来て、ごらんなさい。主がいかなる救いを成し遂げられるのかを。

日本における宣教活動について考えると、私たちは、単に主がなさったことの報告者に過ぎません。報告者は決して重要ではありませんが、「来て、ごらんなさい。主がいかなる救いを成し遂げられるのかを」というみことばが成就するのを体験しえたことは幸せであり感謝です。

自分が立てた貧しい計画で無駄なエネルギーを消耗することなく、ただ主が恵んでくださること、主のなさることを感嘆しながら見ているだけでいい者は、何と幸いなことでしょう。恵みの中で成長するということは、自分が衰え、





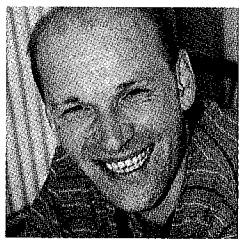
主が盛んになり、ただ主がなさることをそばで見ていることに他なりません。

「私たちの神よ。あなたは彼らをさばいてくださらないのですか。私たちに立ち向かって来たこのおびただしい大軍に当たる力は、私たちにはありません。私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです。」(2歴代20・12)

イスラエルの民は、優勢なアモン人の軍勢に怯えていました。どうすればよいのか。人間的に見れば、何もできません。しかし、自分自身の無力さを知り、それを認めた上で主に従おうとするなら、すべてのことが可能なお方、万能の主を体験することができます。自分の無力さを意識し、主を仰ぎ見る者は、何と幸いでしょう。これは「無関心」とはまったく異なります。

予言者ヨナは、次のようなことを体験しました。主の命令で、ヨナは「ニネベの人々が滅ぼされる」ことを、大声で叫びまわりました。それで何千人もの人々が悔い改め、主に立ち返ったので、主はニネベを滅ぼすことを思い直されました。それを見てヨナは怒りました。「あなたが恵み深い神であられるのを、私は知っていました。だから最初に命じられたとき、私は反抗したのです。私が告げて回ったことをこんなふうに反故になさるのなら、私のいのちなど取ってください。」そして彼がふてくされて町を見ていると、主は一本のとうごまの木を備え、彼に日陰を与えました。が、その木は枯れました。彼は再び怒りました。ヨナは主に不従順であり、また町の人々に対して愛の心がなく、無関心だったのです。しかし主は最後にこう言われました。





「わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」　(ヨナ4・11)

いったい、ここでは何が問題なのでしょうか。主が何を与え、どのように助けてくださり、私をどこに置かれるのか、それを主からどのように受け取るのかが問題なのです。

ある家族に、治療が不可能と言われている病気の子供がいました。その子が30歳になったとき、集会の人々が集まってお祝いし、この病気の子のために主に感謝が捧げられました。招かれた人々はこのような体験をしたことがなかったので、たいへん驚きました。普通なら、病気の子は隠されるべきものであり、神に感謝されることなど、考えられないことだったのです。

ある人は次のようなことを告白しました。飼





犬が病気なり、安楽死のための注射がされたとき、この忠実な犬は最期に飼主をもう一度じっと見つめました。飼主は庭に出て、この一匹の犬のために泣きました。

ヨナは人間に対して無関心でしたが、神様はそうではありません。ヘルマン・ベツルは次のようなことを言いました。「街を見てまわると、人々は破滅に向かっているにもかかわらず、有頂天になり、歓声をあげている。その姿に私の心は痛む」。

この失われつつある世のために、今日、また改めて祈りを喚起する必要があります。

ドイツの雑誌で、「祈り」が少なくなってきていることに警鐘を鳴らす、興味深い文章を見つけました。今の時代、教会、集会を問わず、多くの場合に当てはまるのではないかと思い、痛烈で風刺的な文章ですが、あえてご紹介します。その底に流れる著者の危機感をご洞察ください。

＊＊＊＊＊＊＊＊

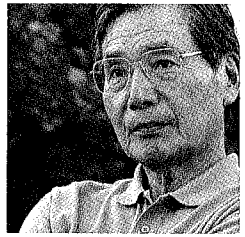
― 故「祈り会」氏の死亡通知 ―

「祈り会」氏はかねて長期療養中の所逝去されました。「祈り会」氏は数十年前、リバイバル(信仰覚醒)の時代に生まれ、いきいきした証しや賛美が溢れる中で大きく成長されました。特に長年、教会で重要な役目を果たされましたが、ここ数年は、膝の硬化症で(祈りのために)ひざまずくことが少なくなり、衰弱しておられました。

「祈り会」氏の妻の「学び会」夫人は、数年前、同じ病気で衰弱し死亡しておられます。主治医はこの世との親交を重視する某学派の巨頭でしたが、病気の治療のため、「組織」注射法や、「お茶飲み会」刺激法を考案、改善を図るべく他の新療法も次々と試みましたが、結果は見るべきものもなく、空席の目立つ教会に騒々しい音楽がこだまするだけで、何ら病状は改善されませんでした。

「テレビ熱」も、患者のいのちを奪う要因です。死後解剖の結果、多くの患者は不毛な娯楽番組の見すぎで心の栄養失調状態にあることが判明しました。「テレビ熱」はまた、悔い改めや祈りを著しく減少させ、神への怖れ、真の信仰を欠如させたので、死は不可避でした。また、兄弟姉妹の愛のない環境が死期を早めたことも否定できません。それを反映して生前に残された遺言は、冷たい事務的な内容で






した。なお、参加者が極端に減少しているので、教会の水曜日の「祈り会」は、以後、中止いたします。ただし、若者の「福音劇団」が上演の練習をする日は、祈り会ではないので教会を開けます！

＊＊＊＊＊＊＊＊

こういう状態になってしまわないよう、私たちはしっかりと主に祈り求めていく必要があります。

さて、次にご紹介するのは、よく知られているH.E.アレクサンダーの詩です。今のときの大切さ、今、私たちが何をなすべきかを、強く促しています。詩の内容に該当する聖句は、**エレミヤ書8章20節、「刈り入れ時は過ぎ、夏も終わった。それなのに、私たちは救われない」**です。なお、詩の中の「私たち」は、信者のことではなく、イエス様の救いを伝えられなかった人々、福音を宣べ伝えられなかった人々のことを表しています。

恵みのときは終わりに近づいている。
広い世界に、いまや静かに、
終わりの日が近づいている。
遠い砂漠の底から、
不安な叫びが聞こえてくる。
私たち（イエス様を知らない人々）の真っ暗な夜には、
決して光がさし込まない。
私たちを照らす神の恵みがなければ、
私たちは苦しみと闇の中、
暗い道を行かねばならない。
永遠に、永遠に。

あなたがた主を信じる者は歌い、
喜びに満ちて、「自分は神の子である」と言う。
しかし私たちは、死の生け贄となり、
恐怖に満ち、ひどい苦しみに満ちている。
あなたがたはなぜ、
立ち止まっていて、夜の始まる今、
私たちを救おうとしないのか。
あなたがたはなぜ、
主がそのひとり子を遣わして、
私たちを愛してくれていることを
教えないのか。

あなたがたのおかげで、
私たちはそれを知らずに、
希望もなく滅びいく。
私たちは死ぬために生まれたのであり、
死は、永遠から永遠にいたる我々の運命なのだろうか。




私たちには星が輝かない。
約束の光も照らされない。
遠くの方にさばきの雷が聞こえる。
なぜ、なぜ、あなたがたは急がないのか。
神が「行って、全世界に、十字架の勝利者を宣べ伝えよ」と言っているのに。

あなたがたは、
私たちのあわれな心のための、
「喜ばしい知らせ」を持っ ている。
傷をいやす薬を、
苦痛を永遠にいやす薬を持っている。
それなのに、なぜ、
そんなに長く、沈黙して　いるのか。

早く、主を信じるあなたがたの、
信仰の岩に至る道を、信仰の言葉を、
私たちにも聞かせてほしい。
神があなたがたに与える慰めを、
私たちにも与えてほしい。
私たちの涙を拭ってほしい。
私たちが、永遠のいのちを持たず、死んでいくのは、あなた方のせいだ。
どうか私たちをも祝福に導いてくれ。
私たちは罪に悩み、夜は近づいている。
私たちは、自分のたましいを、悪魔の力に与えなければならないのか。
永遠に。永遠に。
近くの国から、遠くの国々から、
何千万という人々が、
主を求めて叫んでいる。

主よ。私たち主を信じる者に、
新しい恵みをお与えください。
私たちの罪をお赦しください。
あなたのためにのみ、私をお用いになり、
私たちを使者としてお遣わしください。
あなたを待ち焦がれているたましいの所へ、
十字架の言葉を運ぶ者としてください。
彼らが永遠に、永遠に、
滅びることのないように！





病気のおかげでイエス様を知りました

喜屋武昌信

ドイツの皆様、今日は。沖縄キリスト集会の喜屋武昌信と申します。

私は今からちょうど２０年前、５１歳のとき脳内出血で倒れ、右半身麻痺のからだとなりました。その時の失望と不安、そして死への恐怖は、何ごとにもたとえようがありません。このからだを治すためなら、どんなことでもしようと思い、中国までも針治療に行き、またいろいろと神だのみに走りました。しかし、ひとつとして信じられるものがなく、ますます私の心は痛み、飢え渇いていきました。

月日はたち、「本当に信じられるものがほしい」と思っていた時、クリスチャンの恩師から２冊の本をいただきました。しかし、その本に目を通すこともなく、机の上に置いたままにしていました。その本こそキリスト集会発行の「光よあれ」であったことは、後になって知りました。そんなことがあって間もなく、職場の同僚の方から、「沖縄キリスト集会に、ベックさんというすばらしい方のお話を聴きに行こう」と誘われました。私は、退屈しのぎに聞きに行ってみようと思ったのですが、それはまさに主の導きでした。

イエスは彼に言われた。「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません**」（ヨハネ　14・6）

そのときベックさんは、聖書のメッセージを語られた後、私たち夫婦のためにお話し合いをする場を備えてくださいました。私たちはイエス様の福音を聞き、ベックさんのお祈りに続いて、悔い改めのお祈りをしました。すると何とも言えない平安な気持ちになり、喜びが湧いてきたことを覚えています。やっと私にも頼れるものがみつかりました。本当に信じられるものは、真理であるイエス様でした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

イエスは言われた。「**わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことがありません。**」

（ヨハネ　6・35）





この時以来、私の生き方は全く変わりました。あれほど病気を治すことに奔走していた自分が、もう病気はどうでもいいと思ったのです。本当に不思議でした。私は病気のおかげでイエス様を知り、不安と死の恐怖から解放されました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。　（詩篇　119・71）

私に対する答えが聖書の中にあったことに驚きました。

このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。

（コロサイ２・３）

ドイツ喜びの集いに初めて参加したとき、ドイツの兄弟姉妹が、遠い沖縄の私のことまで祈っていてくださったことを知り、大変驚き、感激したことが忘れられません。本当にありがとうございました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。　（伝道者　３・11）

喜屋武昌信（きゃん・しょうしん）
1936年沖縄県生まれ。島袋小、中、コザ高、
琉球大学教育学部卒。妻信子、子供一男三女。



みことばや聖歌に、涙があふれて止まらなくなりました

長谷川信枝

この美しいドイツのアイドリンゲンで、「証し」をお話する恵みにあずかれましたことを感謝します。

昨年4月、私の夫長谷川浩一が腎盂癌（がん）を宣告されました。その癌は、医師の予想を上回る速さで増殖する恐ろしい癌でした。

夫は毎日、日本の神仏を頼りに拝んでいましたが、恐怖を取り去ることはできませんでした。そして、暗闇の中へ吸い込まれるように、元気を失くし、自殺まで考えるようになりました。私も、ひと時も目を離せない状態になりました。

苦しみもがいている私たちに、小学校以来の友人が、吉祥寺のキリスト集会に誘ってくださいました。インチキで恐ろしい宗教が数多くある中、私はいわゆる一般的な仏教徒として、墓参りや、お寺での法要などに、欠かさず出席していた者でした。イエス様も聖書も何も知りませんでした。ですから、恐る恐るひとりで集ったのですが、その時に聞いた聖書のメッセージや聖歌に、ただただ訳もわからず涙があふれて止まらなくなり、だんだん心が軽くなっていきました。本当に不思議な体験でした。

すぐに、ベックさんが夫のお見舞いに来てくださいました。夫は、ベックさんのお話を聞き、何かを感じたのでしょう。涙を流して喜びました。亭主関白だった夫のそんな姿を見たのは初めてでした。





すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

私たちがイエス様を信じていこうと決めたのは、この時の体験が一番の理由だったと思います。昨年7月のことでした。「イエス様は大急ぎでやって来られたのだね」とベックさんは言われました。その日以来私たちはみことばに感動し、キリスト集会の人たちの毎週のお見舞いや、各地の集会のお祈りの後押しのおかげで、徐々に気持ちが軽くなっていきました。イエス様がそばでしっかり抱きとめてくださっていたのでしょう。癌の転移で全身が蝕まれていた時にも、夫は「自分の人生で今が一番幸せだ」と言っていたのを思い出します。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。　（1コリント　10・13）

このみことばでどんなに励まされたことでしょう。そして、天国に夫が召された昨年の12月16日まで、笑顔の絶えない病室に、イエス様はしてくださいました。

夫の召天からまだ6ヶ月しかたっていないのに、こうして私はドイツにいます。仏教では、一周忌までは、喪に服する期間と言われていますが、生前「病気が治ったらドイツに行こうね」と言っていた夫の願いの地へ、どうしても行きたかったのです。このことを家族が理解してくれたことに感謝しています。きっとイエス様が備えてくださったのでしょう。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ　5・16～18）

私は、今朝の礼拝後の福音集会でディーターさん（ドイツ・ガイスバイト集会）が語られたように、豊かないのちにあずかり、幸福の真只中におります。夫もきっと天国で喜んでいてくれることでしょう。ありがとうございました。

長谷川信枝（はせがわ・のぶえ）
1944年大阪生まれ。大阪教育大付属池田小、中、相愛学園高、大阪YWCA英語学校卒。
夫、浩一さん（死別）、子供、一男一女

主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません

水渡紀久雄

グーテン・ターク(今日は)。
水渡紀久雄と申します。川崎市から来ました。
私は長い間サラリーマン生活を続けてまいりましたが、8年前59歳の時にイエス様を信じ救われました。家内も、はじめは私の突然の変化に驚いておりましたが、やがて救われて、3年後に夫婦そろって洗礼を受けることができました。救われた者としての喜びは、ダビデが詩篇23篇で歌っているとおりです。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。 (詩篇23・1)

もちろん、救われたからといって、苦しみ悲しみがなくなるわけではありません。私たち夫婦も、受洗して2年後に娘の自殺という思いもかけないことを体験しました。娘は、その1年ほど前からあれこれ悩んでいた様子でしたので、早くイエス様に出会って平安を得てほしいと祈っていました。しかし、突然のことで、どうしようもありませんでした。たいへんなショックであり、悲しみでありましたが、慰めをイエス様から与えられました。
連絡を受けて駆けつけた時、私の頭に「主を恐れよ」という詩篇のみことばが浮かび、そのみことばが「主のなさることに信頼せよ」と私に語りかけてくださったのです。また「娘はどこへ行ってしまったのだろう」という思いに対しても多くの慰めのみことばが与えられました。
今でも、わからないことはたくさんあります。そんな私たちのためにイエス様は、もう一つ特別なみことばを与えてくださいました。

「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」 (ヨハネ13・7)

このみことばに家内も励まされています。本当に感謝なことです。
イエス様は信じる者のために、すべてを働かせて益としてくださるお方です。ですから今は、ただそのままを主の御手からいただき、すべてをお委ねすることにしています。いずれイエス様は私たちの疑問を解いてくださるでしょうし、その時は言葉もなく主の愛とご計画に感謝するでしょう。今は、残された家族の救いを毎日祈っています。
当初、私たちの祈りは聞かれていないのではないか、と思ったこともありました。しかしイエス様は、このようにみことばを通し、日々の導きを通し、そして信仰を共にする方々を通して、いつも私たちと共にいてより豊かにご自身を示してくださいました。これこそ私たち夫婦の祈りに対するお答えだったと、今は思っております。ですから詩篇23篇6節でダビデが歌った言葉は私たちの願いでもあります。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。 (詩篇23・6)

イエス様のもとにいるならば、私たちは決して恐れることも心配することもありません。



水渡　紀久雄(みときくお)
1940年横浜生まれ。
大崎中、日比谷高、東京大学経済学部卒。
川崎市在住。妻君子さん。一男二女。



4人の証し

主は私の声、私の願いを聞いてくださる

青木公子

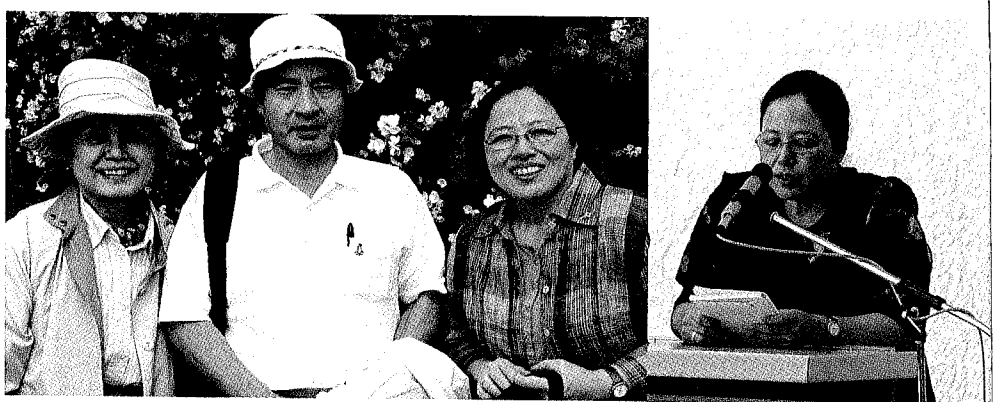
今日は。沖縄県宮古島から参りました青木公子と申します。長い間、私たちのことを祈ってくださいまして、ありがとうございます。

私は主人と一致がないことや死の恐怖、子育ての不安から、確かなものがほしいと求め、キリスト集会発行の「光よあれ」第4集を通してイエス様と出会うことができました。

すべての問題が、自分のわがままから来ていることを知らされ、心から悔い改め、主人にも謝ることができました。そして、すべての心配や不安から解放され、イエス様を中心にすれば主人とも一致していけると思いました。ですが、主人は全く受け入れてくれず「信仰を捨てろ」と迫り、8年間全く口をきかなくなりました。

集会に行けず、集会の本や録音テープも一切ダメという生活の中、主人に、救われてほしいと願いました。でも主人の態度は全く変わらず、ぴりぴりと張り詰めた、息の詰まるような日々に、間にはさまれた子どもたちも苦しむようになりました。このままではダメだと思わされた私は、子どもたちと共に家を出て、宮古島の実家に戻りました。

家を出てから7年になりますが、主人は強くなるばかりで、「信仰を捨てないなら戻ってくるな」という手紙が来ました。主人の頑なに拒む態度は変わりませんが、その一方でイエス様は私の祖母や叔父、妹たちの家族を次々に救い上げてくださいました。家を出た時、13歳と11歳だった2人の息子も、今は大学2年と高校3年生になっています。



私は主人と一緒に洗礼を受けたいと思い、待っていましたが、息子たちがイエス様を受け入れ洗礼を受けたいと言ってきました。それで昨年の夏、息子たちと一緒に私も洗礼の恵みにあずかりました。

私の母は統合失調症で長い間、実家に戻されていましたが、イエス様が宮古に戻してくださいました。思いがけず、私たちと妹たち家族も含む4世帯12人が一緒に住むことになりました。大人は父以外が全員救われており、救われていない父も、私が救われた当時は強く反対していたのに、今は理解者です。子どもたち6人も小さい頃からイエス様を信じ、高校生になる頃には個人的にイエス様を受け入れて、大学3年生を頭に6人全員がイエス様から離れることなく、成長させていただいています。本当に感謝でいっぱいです。

夫の両親からは、この7年間、「子どもたちに信仰を持たせないでほしい、後継ぎにしたいから。長男を戻すように」と何度も手紙が来ています。今年3月、長男は自分の意思で父に手紙を書きました。内容は「イエス様に従って歩み、イエス様から離れることはない。また、お父さんが信仰を受け入れない間は、会うことも戻ることもできない。お父さんの救いを祈っています」というものです。手紙を出して2ヶ月が経ちましたが、主人からの返事はありません。主人の救いを祈っていただければ幸いです。

イエス様は、家を出て以来、毎年ドイツキャンプに参加させてくださっています。子どもたちも、力強い助け手として成長させていただいています。私自身は間違いばかりで、愚かなことしかできない者でありますが、イエス様はこのような者の祈りにも豊かに応えてくださっています。イエス様は、「ただただ信頼しなさい。わたしがするよ」と、おっしゃってくださいます。真剣に祈れば必ず聞いてくださいますし、安心して将来に向かうことができます。この恵みを知らされていることを、心から感謝しています。

最後にみことばをお読みします。

主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。
(詩篇37・7)

私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。(詩篇116・1、2)

この神こそ、私に力を帯びさせて私の道を完全にされる。(詩篇18・32)

青木公子(あおき　きみこ)
「略歴」1958年沖縄生まれ。
平良第一小、平良中、宮古高、文化女子短期大学卒。
夫と長男、裕志さん、次男、貴嗣さん。
実家の衣料品雑貨店を妹家族と経営。







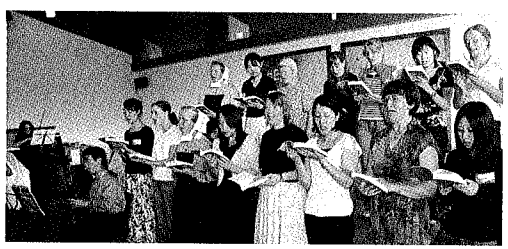


2008年ドイツよろこびの集い予定

5月28日—6月 4日　ミヘルスベルグ
6月 5日—6月12日　ミヘルスベルグ
10月 8日 — 15日　フィリンゲン
10月16日 — 23日　フィリンゲン







みことばで父は救われました

ツァオ 陽子

（2006年11月23日、姫路野里教会で行われた父、藤井圀祥さんの葬儀で語られた証しです。）

今から少しの間、「父の思い出」ということでお話させていただきます。

はじめに、聖書の中からみことばを、お読みします。マタイの福音書 5章3節です。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

このみことばには、私が昔、まだ小学生のころに、この教会の日曜学校に通っていたときに出会ったのですが、まったく何のことかわからず、不思議なことばだなあと思ったのを今でも覚えています。

でも今、父の最期のときを振り返ってみますと、本当にこのみことばは父にぴったりだったなあと実感できます。

今からちょうど3年前、私の下の子のヨハンが生まれてすぐのころに、父のがん発病の知らせを受けました。私は結婚してオーストリアに住んでいて、しかも出産直後ということもあり、すぐにかけつけることもできず、ただもうオロオロするばかりでした。「これで最後かもしれない」という思いもよぎりました。

もう無我夢中で、父の手術の前に間に合うようにと思って、一通の手紙を書きました。お父さんのことを本当に愛してくださっている方がいるんだよ、ということを伝えたくて、思いつく限りのみことばを聖書から引用して手紙に書きました。

父はその手紙を手術後に読んだそうですけれども、あとで父と電話で話したとき、「手紙をありがとう、あの神さんのことば、——父はみことばとは言いませんでしたけど——病室で一人で読んで泣いた」と言っていました。私は、「ああ父は、みことばを神様からのことばとして受け取ってくれたのだなあ」と思って、感謝でいっぱいでした。

たくさんのみことばを書きましたので、全部は覚えていませんが、そのうちの一つは旧約聖書のイザヤ書43章4節でした。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

手術後、父は元気になって自宅療養中でしたが、今年の夏の終わりごろからまた急に容体が悪くなったという知らせを受けました。私はまた父に手紙を書きました。そのときもまた、たくさんのみことばを添えました。父はあとで電話でありがとうと言っていました。

9月の半ばごろ、もう最後かもしれないという思いで、家族そろって日本にやってきました。その期間中に父は2泊の外泊許可をもらい、家に帰ってきました。トイレに起きる以外はずっと寝たきりの状態で、父は一日中、自分の好きな音楽を聴いて過ごしていました。

そんなとき、私の主人のダヴィッドが、「一度お父さんとゆっくりと話したい」と言い出しました。突然だったので私もちょっと驚きましたが、父も「いいよ」と言ってくれたので、私が通訳をして、ダヴィッドがドイツ語で話し始めました。

「お父さん、ずっと話したいと思ってたけどなかなか時間がとれませんでした。実は、ぼくは数年前に大きな事故に遭いました。高いところで仕事をしていて感電して、落ちてしまったのです。感電したときには、もうこれで自分は死ぬんだと思って、とっさに本能的に心の中で、『イエス様、イエス様!』と叫んでいました。今こうして健康でいられるのは本当に恵みですけれども、でもねお父さん、死は終わりじゃないんです。肉体と魂が離れるだけで、魂は永遠に生き続けます。

そして普通、ひとはこう言うんです、『良い人は天国に行って悪い人は地獄へ行く』と。でも、そうじゃないんです。神様からみれば、私たちひとりひとりはただの罪びとなんです。だからイエス様が十字架上で私たちの罪のために死んでくださったのです。そして、心から『イエス様!』と叫ぶことができる人は、天国に行くんです。

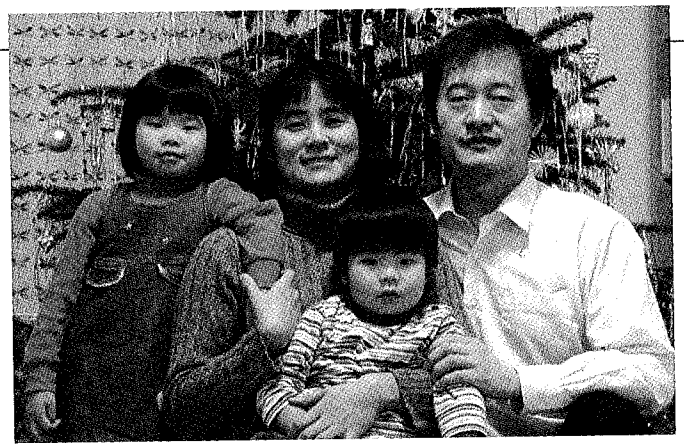
イエス様といっしょに十字架にかけられた犯罪人がこう言ったのです。『**イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。**』(**ルカ 23・42**)

するとイエス様は、彼に『**あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。**』(**ルカ 23・43**)と言われたのです。だからね、お父さん。洗礼を受けたから、ではない。何かの宗教に入ったから、でもない。本当に心から『イエス様!』とすなおに叫べる人が天国に行けるのです。」

父は、通訳する私の目を真剣に見つめていました。本当に真剣なまなざしでした。父のあんな顔はそれまで見たことがありません。きっと心の中は死への不安でいっぱいだったのでしょう、「自分はいったいどこへ行くのだろうか?」と。

ダヴィッドはそのあと、こう言いました。「お父さん、ぼくにはイエス様を紹介することしかできません。今からお祈りするので、本当に心の中でそのとおりだと思ったら、アーメンと言ってください。」そして私たちは父の手を握ってお祈りしました。

「天のお父様、あなたは天と地を創造されました。すべての命あるものを造られました。そして、私たち罪びとのためにイエス様が十字架上で死んでくださり、3日目によみがえってくださったことによって、私たちに永遠の命を与えてくださいました。私はあなたの前に多くの罪をおかしました。そして今、あなたは私の心の中もすべてご存知です。どうぞ赦してください。そして、ありがとうございます。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。」



左から、長女スーザンさん、陽子さん、長男ヨハンさん、夫ダヴィッドさん。

父は涙しながら、はっきりとアーメンと言いました。ダヴィッドの手をとって、「ありがとう、ありがとう」と泣きながら言っていました。死が近いということは、父には伝えられていませんでしたが、どんどん弱っていく自分の体を見て、死について考えざるを得なかったのではないか、と思います。父は発病した3年前から、ずっとその不安の中に置かれていました。

しかし、その不安も消え去りました。3人でお祈りした翌日、今日の葬儀で奏楽をしてくださっている奥田さんがお見舞いに来られたのですが、父は奥田さんに開口一番、「もう死ぬのはこわくない」と言ったのです。

父は晩年に病に倒れ、弱くされ、心貧しい人とされました。まるで幼子が親にすがりつくように、天の父にすがりついていきました。芦屋キリスト集会の森島さんは何度か父のお見舞いに来てくださいましたが、初めて来られたとき、ダヴィッドが語った十字架上の犯罪人のことを記した聖書の箇所を、読まれたそうです。そして父は涙ぐんでいたそうです。

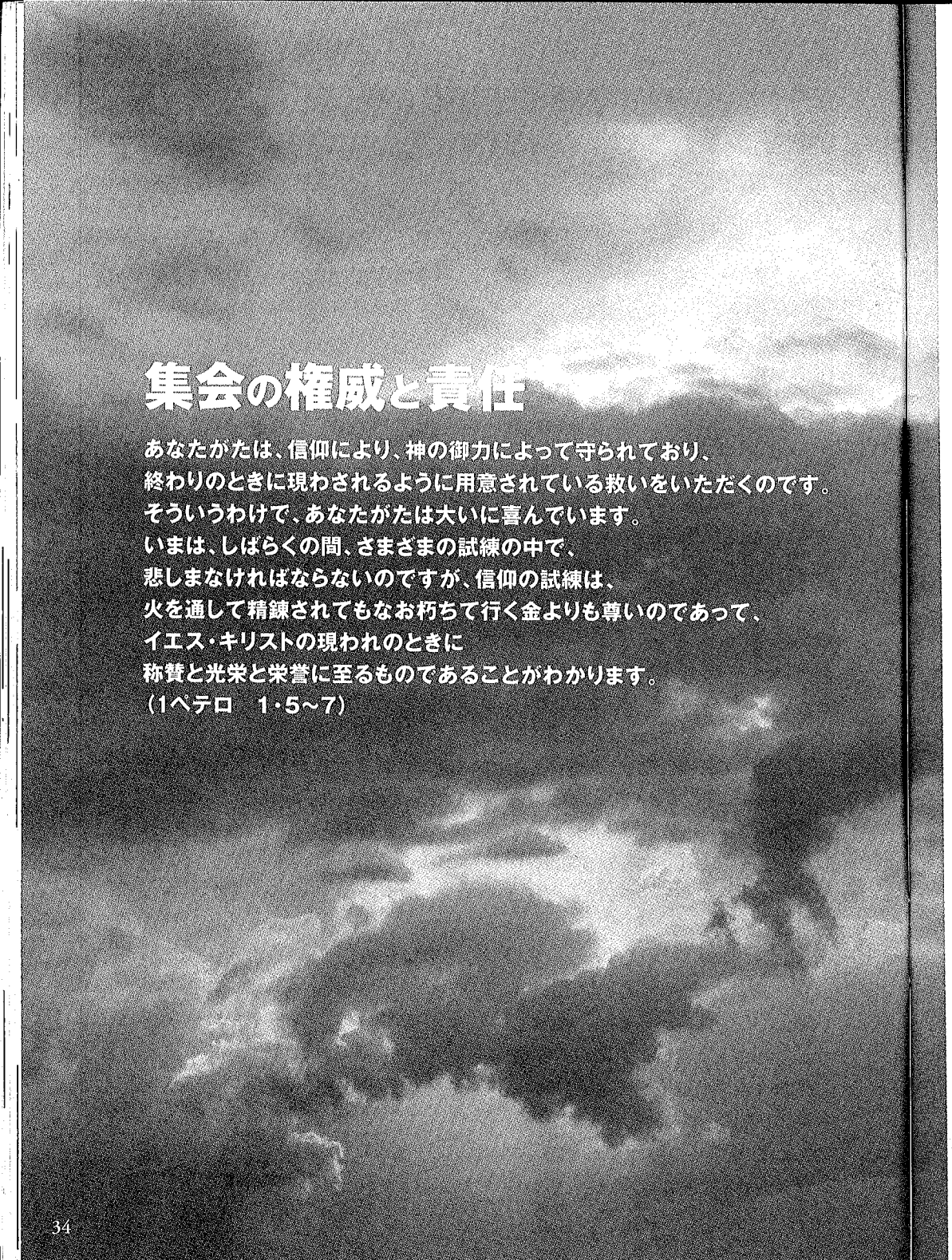
私が病院へ行ったとき、父に「お祈りしようか」と言いますと、「うん」と言っていつも手を差し出してきました。まるで子供のようでした。短い間でしたが、父と祈りの時を過ごせたということは、本当に恵みでした。

父は最期まで、無宗教でした。でも天国の確信を得て、平安のうちに、父を一番愛してくださっている方のところへ行きました。そのことを共に喜んでいただければ本当に幸いです。

最後にもう一度、最初のみことばを読んで終わりにしたいと思います。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

1967年兵庫県生まれ。姫路市立城北小、広嶺中、神戸山手女子高音楽科、東京芸術大音楽学部、ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院卒。夫 ダヴィッドさん、長女 スーザンさん、長男 ヨハンさん。オーストリア・ザルツブルグ市在住。



集会の権威と責任

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、
終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。
そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。
いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、
悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、
火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、
イエス・キリストの現われのときに
称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。
（1ペテロ　1・5~7）

聖書は、イエス様を信じる者に「信仰には戦いがあります」と語っています。

使徒の働きで、パウロはルステラやイコニオムの兄弟たちに、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と言いました。イエス様を信じるひとりひとりは、信仰の歩みにおいて、戦いを避けることはできません。ですから信仰の戦いが嫌だと言う人は、イエス様を信じることはできないだろうと思います。

どのような信仰の戦いがあろうとも、私は、もうこの世で、このままの状態で留まることはできないと思い定め、信仰の道を歩むほかないと思い定めた人だけが、天の御国への道を歩む者となるのではないでしょうか。

信仰の歩みにおいて起こる最もやっかいで深刻な問題の一つは、決して未信者との関係から起こるトラブルではないと思います。まだイエス様を知らない人は、霊的に盲目です。イエス様を知っている人のように、霊的な強さの秘訣を知りません。かつて私たちがイエス様を知らなかったときには、結構ひとりで自分の力でやっていけると思っていましたが、主を知ってみてからそれが実に危ういことであると気づいたはずです。主を知らない人は本来的にクリスチャンの敵ではありません。

信仰については、クリスチャンはプロフェッショナルであるけれど、未信者は、アマチュアであると言っていいと思います。クリスチャンは、どうしたら自分は強くなれるかをよく知っています。つまり、自分をむなしくすること、生ける主に信頼すること。これによって私たちは、いかなることにも勝ち得て余りある立場を取ることができます。未信者は高ぶりの恐ろしさを知りません。だから平気で高ぶっています。私たちは、そこに未信者の一番の弱さがあることを知っています。

まだ主を知らない夫たちの迫害にあって、苦しむ姉妹方のことを聞きますが、それは大した問題ではないのではないでしょうか。本当に信仰に立って自分を低くして仕えるならば、どのようなときにも主に信頼して歩みさえすれば、クリスチャンを迫害する人はいませんし、私たちは守られます。ですから現代において、信仰の自由を認められた社会において、未信者とのトラブルは非常に簡単なものだと私はいつも思います。私たちが信仰に立ちさえすれば、己をむなしくさえすれば、主により頼むことさえしっかりしていれば、私たちは障害物のない道を歩むことができる

「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。
そして神のものは神に返しなさい。」（マタイ　22・21）

集会の権威と責任

のです。誤って人を裁くような態度を取るときに、問題が起こってくるのです。主を知らない人は、力があるように見えていながら、無力な張り子の虎みたいなものです。私たちにとって抜き差しならない問題は、イエス様を知っている者同士の間に起こる誤解やトラブルではないでしょうか。なぜかと言いますと、信者間の問題になってくると、お互い信仰をかけての争いとなるからです。きっかけとなった問題そのものではなく、相手方の信仰のあり方そのものを、お互いに批判したり、批評したりするようになるからです。私たちはそのような問題がよく起こっていることを、見聞きします。私もクリスチャンになってしばらくして、そのようなクリスチャン同士の醜悪なことは是が非でも避けたいと切に願うようになりました。どういうことがあっても、信仰のゆえに争いあうことは、避けたいと願いました。しかし、集会の歩みのなかでは、そういう問題から全く逃れることができないのだということを知るようになりました。多かれ少なかれクリスチャンたちはそういう問題に巻き込まれます。その度に、神様はどうして、こういった惨めな事態を許されるのかという思いを抱かざるを得ませんでした。

この世の争いや対立で最もやっかいなものは、どういうものでしょうか。よく報じられる暴力団同士の争いはどうでしょうか。あれは、ごく低い次元の争いです。金によって決着のつく、金を求めての争いだからです。それよりも、もっと根深い、陰惨な争いは、例えば思想集団、左翼のゲバなどです。同士間の粛清ということになってくると、それは私たちに暗い思いを抱かせます。イデオロギーによって相手を裁くのです。裁かれる方は、全人民の敵として粛清され、いわば歴史から抹殺されるのです。単なる暴力団同士の争いは、たいした争いではありません。左翼の思想集団の粛清は、すさまじいものですが、しかしそれよりももっとやっかいで、一歩誤るともっと根深くなってくるものは、信者間に起こる争いではないでしょうか。

宗派間の争い。ラテン語には「神学者の憎しみ」という言葉があります。真理というものを掲げ、神のみこころを研究する神学者同士の憎しみあいこそが、最もやっかいな根深いものだという意味です。そこにおいては、互いが神の御名によって裁かれるからです。特に、義と愛の神、全能の創造主なる神を信じるクリスチャンの争いほど、どうしようもない、やっかいなものはないと思うのです。争い合うお互いが、同じ問題に対して、正反対の決断を下して相手方を否定するからです。このような争いでは、一方がこう言うと、他方は必ずああ言います。一方がこのみことばを持ち出せば、他の側はあの聖句を当てはめてきます。このようにして論争は、決着することはないのです。だんだん、泥沼のような状態にはまり込んでくるのです。そのことによって人々は信仰というものに対して恐れもし、不信感をも抱くようになるのです。やっかいなのは、双方とも本気で自分は正しい、自分は聖書の土台に立っていると信じ込んでいるということです。

残念ながら、キリスト教の歴史は、このような汚点を多く残しています。異端として神の御名によって裁かれ、なかには、火あぶりの刑に処せられた人々さえ少なくないのです。カトリックによって、火あぶりにされて殺された、例えば、ジョン・フスのような改革者もいました。

逆に、カルバンの治めたスイスにおいて、カルバンのプロテスタントの側によって火刑に処せられた事例もありました。

信仰上の対立というものは、行き着くとそのようにすさまじいこととなってきます。

かつて、早稲田大学の創立者の大隈重信は、西洋人が自分のところに尋ねてくると、いつも一つの問題を投げかけて、彼らをやり込めていたそうです。彼はバラ園を造って、多くのバラを育てながら、訪ねて来る西洋人にそのバラの花を差し上げて喜ばせていたそうですけれども、彼のもとにある時二人の若いアメリカ人の婦人宣教師が訪ねてきたそうです。それで、大隈重信は、自分の娘くらいの若い宣教師に、非常に喜んでバラを切ってもてなしながら、またいつもの得意の質問をしたそうです。その質問というのは、「あなたがたの国は、キリスト教の国であって、また聖書は神は愛なりとも教えている。そしてその教えを私たちに伝えようとして来てくれている。それは、結構なことだが、あなた方キリスト教国の歴史を見ると、神の愛だとか正しさとか言いながら、お互いが激しく戦いあう歴史ではないか。ときには血で血を洗うような戦いの歴史ではなかったか。」と質問をしたそうです。普通の人は、当時の総理大臣・大隈重信の言うことですから、「確かに閣下の仰るとおりです」といって、引き下がったそうですが、この二人の婦人宣教師は、こう答えたそうです。「確かに閣下の仰るとおり、私

集会の権威と責任

**だれでも行き過ぎをして、
キリストの教えのうちにとどまらない者は、神を持っていません。
その教えのうちにとどまっている者は、御父をも御子をも持っています。
（2ヨハネ　9、10）**

たちの先祖たちはこの問題で、痛ましい争いを行い、多くの過ちを犯しました。私たちならそのようなことを避けただろうにと、残念に思います。しかし、信仰の問題においては、ときには、血を流さねばならないということ、命をかけるに値することだと先祖たちが考えていたことは、正しかったと思うのです。その点において、閣下の言われるような宗教上の争いをしない日本人の考え方を、日本人の美点だとは我々は思いません。」と答えたそうです。大隈重信は、そのときは、「そのようなことはない」と言ったようですが、後に、彼の通訳をしていた永井隆太郎に向かって、「あの二人の若い娘に、自分は本当に参ったと思った。あんな娘たちがいるのだから、アメリカもバカにはできないね」と言ったそうです。

ここに厳粛な真理が含まれていると思います。信仰は血を流すに値する、命をかけるに値するという姿勢。これが大隈重信にして、やっぱりそうなんだと思わせた点だと思うのです。日本人の宗教観のように、信仰について争うのは、馬鹿げている。損得やメンツではお互い争うけれども、信仰においては、自分のすべてをかけて自分の立つべきところを守ろうとはしない。そこに日本人の信仰に対する態度が、現れていると思うのです。

神様は、たとえときとして誤りを含むとしても、信仰に自分たちの全てをかけようとする姿勢を良しとされるから、クリスチャン同士の惨めな対立や誤解や争いをも許しておられるのかなと、私は思うことがあるんです。このように考えれば、私たちは、クリスチャン同士の意見の相違や、そこから出てくる対立をそんなに深刻に悲観しなくてもいいのかもしれないとも思うのです。ただし、相手を憎んだり、それこそ、中世の時代のように火あぶりの刑にするとかは、とんでもないことです。

**「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」
（マタイ　22・21）**

「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」とイエス様は仰いましたが、この世の権力者、すなわち、カイザルは、何を裁くのかというと人の内面をではなく外面を裁きます。この世の力は、私たちの内面を裁く権威を持ってはいません。例えば、この世の法律は、その人の内面すなわち、その人がどのような思想を持っているとか、どういう信条を持っているのかを裁く権威を持っていないのです。この世の法律は、人がどういう心の態度を持っているかを裁くことはできません。例えば、ある人が他人を激しく憎んでいるからと言ってこの世の法律は、その人を裁くことはできません。その人が実際に悪いことをした時点において、その人を裁きます。そしてその人の肉体において処分を与えたり、苦痛を与えたりするのです。「カイザル」ということでイエス様が仰ってるのは、そのことだと思います。この世の権力は人の外面を裁き、内側を裁くものではありません。しかし、集会は、神の集会で、外面をではなく内面を裁きます。集会はそこに集っている人々のたましいのあり方を裁きます。その人の霊的状態が正しくなければ、それを正すために裁くのです。これが集会に与えられている権威です。ただし、その人の外面的な面を裁く権威は与えられてはいません。集会が裁くことができるのは、人の魂のあり方についてです。ですから集会が、その集会の信者に対して取りうる処置の最高限度は何かといったら、「集会の交わりから除名すること」だけです。それ以上のことは集会にはできません。集会は、交わりの中にある人の霊的状態を正す、権威と責任とを与えられているということです。もちろん、交わりから除名するということも決して永久にその人を除名するということではありません。そうではなく、その人が悔い改めて立ち返るときまでのことです。集会は、集会外に在る人の霊的状態について裁く権威を持ってはいません。交わりの中に属し、主の群れとなっている人に対して、主から与えられた権威と責任をもって、その信仰のあり方、霊的健全さについて判断を下し、それを正す責任を負っているのです。

かつて、ある集会におられ、現在独自の立場に立っておられるあるクリスチャンが、しばらく前に私に手紙をくださいました。そこには、「その集会がここ数年の間に行ったある兄弟たちへの除名処分は、いかなる理由があってもなすべきではなかった」と書いてありました。実際には、私たちは、兄弟たちを除名したのではなく、悔い改めるべきである、一致するためには悔い改めてもらいたいと手紙を手渡したのです。けれども、その兄弟たちは、集会が間違っているのであって、自分たちにはその必要はないと言い、集会を自発的に去っていきました。「所詮、神の前においては双方とも、どっちもどっちではないか」という理由

ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種のはいらない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。(1コリント　5・8)

でした。「神は愛なり、という信仰のゆえに、どのような場合でも除名してはいけない。またそのような判断を下す集会も、裁かれる側の人たちも五十歩百歩だ」というわけです。私はその問題に対して、それ以来、真剣に考えざるを得ませんでした。果たして本当にそうなのだろうか。もちろん救いに関しては、人の罪には大小はあり得ません。ですから、救われるために、あの人よりも私の方が罪は軽いから、私は、誰かを裁くことができるなどということはありえません。神様の前において、人は絶対的に罪人として、一切の弁明を許されないのです。しかし、集会のあり方、集会が主から負わされている使命を果たすために、その集会に属する兄弟姉妹ひとりひとりに対して、なさなければならない責任を集会は負っているはずです。その判断に対して、「どっちもどっちではないか」という考えは正しいのだろうか。もしそうならば、聖書もそう述べているはずですが、聖書はそうは言ってないのです。繰り返し言いますように、集会には「その決定を下す正当な権威が与えられている。いや、そうする責任すらある。それをしないことの方が無責任である。」そう聖書はいっているのです。私たちのひとりひとりが、誰かを断罪することができるということではありません。主から与えられている集会に集う者として、ひとりひとりに責任があるのです。集会は神様から担わされている責任を果たさなければならないのです。すなわち、集会の中においては、妨げのない、本当の信仰の交わりが保たれていなければならないのです。そうでないと、本当の重荷を負っている人々が、交わりの中に来て主を見出すということは、できなくなります。

ですから、私たちはひとりひとりが主の前に責任を負っている者であること、また、私たちは、主の御前に自分自身を吟味しなければならない者であること、集会はまた兄弟姉妹のひとりひとりを導く責任を負っているということ。これは聖書の述べている正しい見方ではないかと思います。

分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。(テトス　3・10)

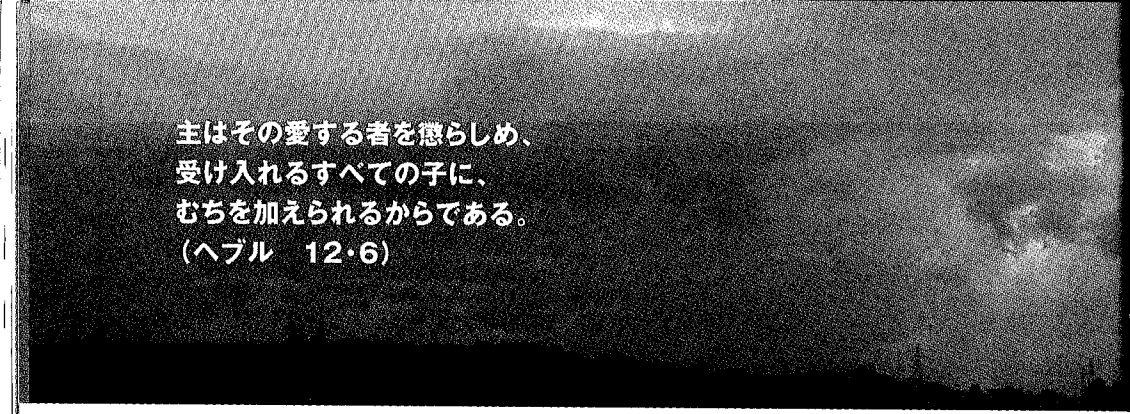
この「分派を起こす」ということの意味は、強情さから不和を起こす者という意味だそうです。強情さを改めようとしないために交わりが妨げられてしまう者を、一、二度戒めてから除名しなさいと厳しくパウロは書いています。

だれでも行き過ぎをして、キリストの教えのうちにとどまらない者は、神を持っていません。その教えのうちにとどまっている者は、御父をも御子をも持っています。あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。そういう人にあいさつすれば、その悪い行ないをともにすることになります。(2ヨハネ　9〜11)

これは、主を知らない人のことを言っているのではありません。イエス様を信じていながら、イエス様の戒めの外に飛び出してしまっている人、信仰をねじ曲げようとする人、そういうクリスチャンとの交わりをやめなさいという意味です。

あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越しの小羊キリストが、すでにほふられたからです。ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種のはいらない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。(1コリント　5・6〜8)

ほんのわずかのパン種が粉の全体をふくらませる。同じように、私たちの肉なるものは、全ての交わりを打ち壊してしまいます。そこには、イエス様の香りはなくて、人間的な過ちばかりが渦巻いています。自分のうちから出てくるものに良いものはないのですから、私たちはいつも注意をして、肉なるものによって振り回されたり、それによって支配されたり、導かれたりしないように気をつけるべきです。イエス様を知っている人は、肉なるものと霊なるもの、御霊なるものとの区別はつくはずです。自分のうちから出てくる、古きエゴに属するものが何かをいうこと、自分の思いを識別する力を持っているはずです。それがなければ私たちは、信仰によって歩むことはできないはずです。自分の肉なるものが出ないということではありません。全てのクリスチャ



**主はその愛する者を懲らしめ、
受け入れるすべての子に、
むちを加えられるからである。
（ヘブル　12・6）**



集会の権威と責任

ンは死ぬまでそれがあるのですから。ですけれどもそれによって支配されないで、御霊によって支配されるということは、可能なのです。パン種を取り除きなさいとパウロが言っていることはそのことです。だから特に集会においては、それが大切な条件というか、クリスチャンひとりひとりの使命、責任なのです。そうでなければこの集会は、一種のサロンに化します。ただちに、あっという間にサロンに化します。問題とそれの渦巻くところになっていきます。私たちが御霊なるものと肉なるものとをよく見分けて、肉ではなくて、御霊の側に立とうとするから、集会は初めて神様のいのちのあるところ、光のあるところ、救いを人々が見出すところとなることができるのです。

イエス様を信じるひとりひとりは、その責任を負っているのです。ですから、集会の責任を負っている兄弟たちは、主の前に、集会が正しく立つことができるように、なすべき責任を負っているのです。

この権威を用いることは間違っている、何があってもそういうことをやってはいけないというのは、聖書の言うことではないのです。

もちろん、そういう判断を下す集会や兄弟たちが絶対に誤ることがないということではありません。絶対に彼らの判断が正しいと言っているのではありません。多くの経験を積み、主に仕えてきた人々の判断というものは、その人々によって導かれている人々の判断よりも、一般的にいって正しいと言っていいのです。信仰の歩みは、だれでも同じ道を歩んでいると見ていいのです。だから同じ経験をして先を歩いている信仰の先輩たちは、後から同じ道を歩んでくる兄弟姉妹たちの問題をある程度、的確に知ることができます。

「この人はこういうところでこういう問題にぶつかっている。取り除かれる問題は、こういうところである」ということを非常に鋭く見る場合もあります。そのようにして、指し示されている人々は、自分には理解できないかもしれませんが、後になってくると、よく分かってきます。主を畏れ、主に仕えている人々の判断というものは、そんなに間違えることはないと見ていいと思います。もちろん、全く正しいということではありません。責任を負っている人々によって、裁かれ、場合によっては、除名されるということは、決して最大の悲劇ではありません。最大の悲劇は、悔い改めることを拒否すること、自分自身のかたくなさに気づかないで、信仰とその力とをだんだん失っていくことにあります。

集会の交わりから除名され、兄弟姉妹との交わりを拒絶されたからといって、主に捨てられているわけではありません。かたくなになれば、懲らしめを受けるのは当然であります。それは、悔い改めて立ち返るためです。私たちの砕かれることがどんなに大切であるかということを学ぼうとしないから、問題が起こるたびに、次々と集会を変わっていく人々がいますが、そういう人は、本当に砕かれる大切さに気づかないのです。砕かれなければ必ず同じ問題にぶつかってしまいます。その問題にぶつかるたびにその人は、あっちに行ったりこっちに行ったりということになるのです。

ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。（1テモテ　1・19、20）

彼らをサタンに引き渡した。もう、行くがままに任せたということでしょうね。もう、好きなようにさせたということではないかと思います。

罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。（1テモテ　5・20）

俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」（2テモテ　2・16～19）

私たちクリスチャンは、自分が受けるどのようなできごとをも、信仰によって、すなわち主の御手から受け取るべきです。苦しみや誤解にあうときには、私たちはますます主を畏れる必要があります。自分自身を深く吟味する必要があります。誤解や試みがあればあ



るほど、私たちは主の前に低くなるべきです。そうすれば、その人の信仰の力と輝きは、試練の中にあっていっそう増し加わりこそすれ、弱まることはありません。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。足なえの人も関節をはずすことのないため、いやむしろ、いやされるためです。（ヘブル　12・5〜13）

そのときには、分からないかも知れませんが、神さまは失敗なさらない方です。主は私たちのうちから、取り除かれるべきものをよくご存知で、私たちをご自身の聖さにあずからせようとして、私たちを試練にあわせられます。あるときは、集会の兄弟姉妹から誤解を受けることもあるかもしれません。彼らがいつでも正しいとは、言えないからです。しかしそういうときでも、私たちは信仰から一歩もはみ出さないで、全ての裁きを主の御手にゆだねて、ひたすら真実と誠実とを持って、信仰の道を進むべきです。

相手が正しかったら聞き入れるが、間違っていたら聞き入れないという態度は一見正しいようですけれど、信仰的には非常に問題のある態度です。現代人は、皆そういうように考えるから根本的なところでは間違っているのです。判断は間違うかも知れないけれど、判断する権威を与えられているのです。この権威をどうあっても、受け入れなければなりません。よく子供は、親のあっちが間違い、こっちが間違いと盛んに言って従おうとしません。生徒は先生に対してあっちが足りない、こっちが足りないと盛んに言います。しかし、この態度は正しくないのです。そうではなく、この権威が主から与えられていることを受け入れることが、まずなければなりません。

そして、相手が間違っていると思っていても、自分は正しい態度を取るべきです。そうすれば誤解は必ず解けてきます。そして、誤解して裁いていた人の方から「すまなかった。私が誤解していました」というように謝ってくるものです。神は、そのように必ず正しい裁きをなさるのです。だから私たちは、誤解は避けられませんけれども、そのことのゆえに心配する必要はないのです。そのことに打ち勝つただ一つの方法があります。先ほども言いましたように、この世で一番やっかいなものは、信仰による争いです。しかし、この一番やっかいな誤解や争いに、いつでも勝利する方法があるのです。

人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。（1ペテロ　2・19〜21）

信仰の勝利は、いつも「負けて勝つ」のです。相手が悪い、相手が間違っていると言って打ち返そうとします。「ストライク　バック」と言いますが、打ち返してはいけないのです。なぜならば全ては、主の御手から来るからです。私たちは、立てられた権威に対して心からへりくだる必要があります。もしそこに立つならば主は、必ず正しい裁きを見させてくださるのです。必ず主は、私たちの義を明らかにしてくださいます。

またそういうことを認めることのできない人が、集会の責任者であれば、その集会は主によって裁かれます。多くの者は、教師になってはいけません。教師に対する裁きは、ずっと厳しいからだとヤコブは言いました。主を畏れている人々はそれが示されたなら悔い改める用意を持っているはずです。集会は、悔い改めて立ち返った兄弟姉妹を必ず受け入れなくてはなりません。もし受け入れなければ、主から逆に厳しい裁きを受けるからです。私たちひとりひとりは、主の権威のもとに守られているのです。私たちが主の権威を認めてそれに従えば、兄弟姉妹は完全に主の御前に守られます。また、集会が間違った判断を下せば、主は必ずそれを明らかになさいます。そういう意味において私たちは本当に自由な者です。

そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度までですか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。（マタイ　18・21、22）

「あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」（マタイ　18・35）

「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」（ルカ　17・3、4）

七度というのは、完全数です。いくつでも、何度でもという意味です。悔い改めた人々を受け入れない集会は、それは集会ではありません。主を知らない人々との問題も一つの試練ですが、主を知っている人との軋轢も、避けることのできない重大な試練のようです。主は、ある御目的を持ってこのような試練を与えるのです。私たちがどのような場合においても、自分の目にどのように映ろうとも、どのように自分が正しく映ろうとも、相手の方が間違っているように思えようとも、どのようなときであっても、私たちが信仰の道からそれないように、信仰に立って揺るがないために、主の権威に服し自分自身を低くして歩むことが、どんなに不可欠であるかを私たちに深く教えるために、このような問題をひとりひとりに与えるのだと思います。どのような問題に直面しても、ただ信仰に立って、そこからそれないことです。そこに確実なただ一つの勝利の道がある。ですから私たちがこのような信仰の試練に出くわすということは、私たちの信仰のリトマス試験紙なのです。人が一番ひどく誤解されるときほど、私たちの信仰が一番厳しく試されているときなのです。自分がどうしても納得できないときほど自分の信仰が試されているのです。

本当に私がそれを主の御手から受けるかどうか。主に本当にゆだねるかどうか。信仰だけに立って、それから、それない態度をこそ主は吟味される。信仰の問題として受け止めるかどうか。人間的な次元でものを見ているなら、それは信仰に立っていません。ものを信仰に立って見ていないからです。そこに立つなら、信仰の勝利はありません。

悪魔はいつでも私たちを人間的な目で物事を見させよう、判断させようとします。だから決して悪魔の罠にかかってはいけません。全てのものは、神様の御手から出てくるのです。偶然は一つもないのです。へりくだる者、聞く耳のある者を神様は必ず導かれるからです。だから、私たちは心配する必要はないのです。問題があるときにこそ、主と人との前に自分自身を低くしたいものです。主の定められた権威を認めて、従おうということです。それが私たちを勝利に導いていく道だからです。

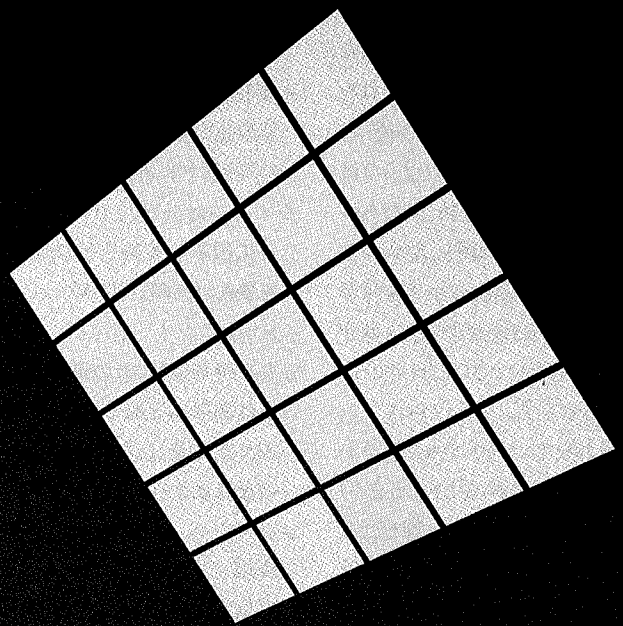
主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。（詩篇　37・3）

主を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。（詩篇37・34）

蘇畑　卓郎
東京富士大学教授。1945年奄美大島生まれ。
大島高、早稲田大学政経学部卒。



主が喜ばれる女性たちの働き



そのほか
自分の財産をもって彼らに仕えている
大ぜいの女たちもいっしょであった。
（ルカ　8・3）

聖書は、イエス様の宣教の旅に、イエス様や弟子たちの世話をする大勢の女性たちが同行していたことを記しています。

その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた。十二弟子もお供をした。また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか自分の財産をもって彼らに仕えている大ぜいの女たちもいっしょであった。（ルカ　8・1〜3）

神の国の福音を宣べ伝える働きは、もっぱらイエス様と男性の弟子たちが行なっていましたが、その裏には、女性たちの奉仕がありました。食事の世話をはじめ、いろいろと仕える仕事をして、宣教活動の良き助け手として、目立たないけれども大変重要な働きをしていました。彼女たちは、イエス様への敬愛の念から、それぞれに自分にできることをして、宣教の業を支えていました。みことばに「自分の財産をもって」とありますから、女たちは犠牲を払うことも厭わずに仕えていたことがわかります。

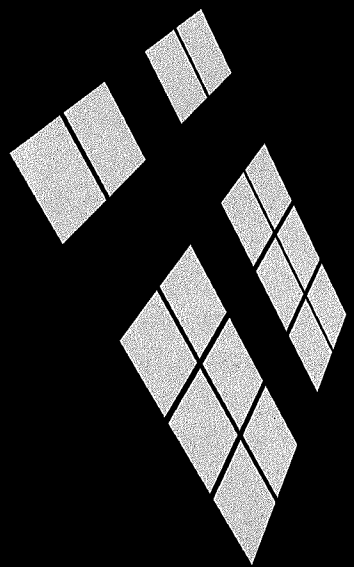
彼女たちがどれほどイエス様を愛していたかは、イエス様が十字架にかけられたとき、男の弟子たちがほとんど全員、逃げ去ったのに、最後までその場に留まって、イエス様が処刑される場面を見送った、という事実からも伺えます。

これらの女性たちは、神に仕えるという人間本来の務めに励んでいた、と言えます。「あなたがたは、この山で、神に仕えなければなりません」（出エジプト　3・12）と聖書にあるように、人間はもともと神に仕えるべき者であるからです。また創世記2章には、神様が「人が、ひとりでいるのはよくない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」と仰せられて、女を造り上げたことが記されています。男の助け手となることが女性の本来の務めである、ということです。マグダラのマリヤらの女性たちは、人間として神に仕え、女性として男性を助ける、という二つの、本来の任務を果たしていたわけです。

私たちのキリスト集会でも同じですね。各地で開かれる喜びの集いや礼拝でも、みことばを取りつぐ働きや、お祈りは男性が行っていますが、集会のための様々な雑用のほとんどは女性が受け持っています。家庭集会でもそうです。聖書のメッセージや「証し」を聞いた後の、食事をいただきながらの「交わり」は、女性たちの働きがなければできません。集会後のお掃除、片付け、食器を洗う作業なども専ら女性たちがやってくださっています。本当にありがたいことです。

このように、主のお役に立った女性のことは、冒頭に挙げた例のほかにも聖書のいろいろな箇所に記されています。例えば、わが子サムエルを主に捧げたハンナ（第1サムエル1・27、28）。若くして夫と死別しながら、しゅう

**人に見せるために
人前で善行をしないように
気をつけなさい。
（マタイ　6・1）**



主が喜ばれる女性たちの働き

とめのナオミに仕えて、その民の神を自分の神として崇め、ダビデの祖父のオベデを産んだルツ（ルツ記）。死を覚悟して、バビロンの王にとりなしの嘆願をして、ユダヤ人を大虐殺から救ったエステル（エステル記）などがそうですね。

主の前に心を注ぎ出したハンナの祈りがなかったなら、サムエルは生まれなかったでしょうし、イスラエルに王国はできなかったかもしれません。ルツの誠実さと信仰がなかったら、ダビデは生まれなかったと思いますし、エステルがいなかったら、イスラエル民族は滅んでいたかもしれません。神様は、イスラエルの民を通して、また肉にあってはダビデの子孫によって、「イエス様による人間の救い」をなしてくださいましたが、そのご計画を実現させる上で、ハンナ、ルツ、エステルらの女性は欠かせない存在でした。

この3人は全員、旧約聖書の登場人物でありますが、新約聖書にも、先に触れたマグダラのマリヤらのほか、多くの女性の働きがローマ人への手紙や使徒の働きに記されています。そのうちの幾人かを見てみますと、まずフィベが挙げられます。「私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。…この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。」（ローマ　16・1、2）とあるように、フィベはパウロをはじめ多くの信徒たちを助けました。またローマのマリヤもペルシスという女性も、信徒たちのために大変な奉仕をしました。同じローマ人への手紙16章の6節と12節に、そのことが書かれています。

使徒の働きには、ドルカスという女性の行いが9章に記されています。ドルカスはやもめなど貧しい人のために下着や上着を作り、主に喜ばれる「隣人への愛」を実践していました（使徒　9・36～39）。続いて12章にはマルコの母マリヤのことが出ています。マルコの母は、エルサレムの自宅を、多くの信徒たちの集いのために提供していました（使徒　12・12～14）。今で言えば、家庭集会の場を提供しているのと同じです。当時マリヤの家には、ヘロデ王の迫害もあって、おそらく毎日のように信徒たちが集い、交わりと祈りの時を持っていた、と思われます。マルコの母の労は大変なものであったと思います。

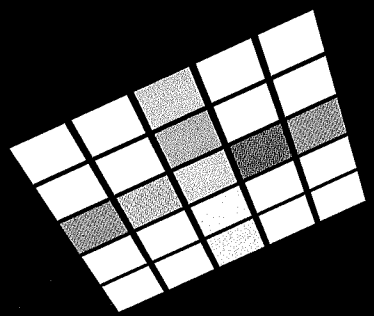
私たちのキリスト集会でも、多くの家庭集会が持たれ、私たちの集会が祝福されている大きな要素になっています。たくさんの方々が、自宅を集会の場に提供してくださっているお陰です。本当に感謝なことです。

それから、もう一つ付け加えたいのは第2テモテに記されているテモテの祖母ロイスと母親のユニケです。テモテは信仰の厚いパウロの愛弟子でしたが、「そのような（テモテの）純粋な信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったもの」（第2テモテ　1・5）でした。祖母と母との、主にある「子育て」がすばらしいものであった、ということです。聖書にテモテの男親の名が出ていないことは、女親の役割の大きさを物語っています。ロイスとユニケが具体的にどんな子育てをしたかは書かれていませんが、祖母と母親の純粋な信仰生活の下でテモテが育ったことは確かです。純粋な信仰を持つことが子育ての一つのポイントであることを教えられます。

以上、主に用いられた女性たちを聖書から見てきましたが、これらの女性に共通して感じられるのは、心から主を愛していた、そして謙虚で控えめな人であった、ということです。言い方を変えますと「彼女たちの奉仕が目立たないものであった」ということです。彼女たちが、心から主を愛していた、ということは、彼女たちの奉仕が喜んで行われていた、義務感から行われたものではなかった、ということですね。それから、控えめであった、目立たない奉仕であったということは、その奉仕が主に喜ばれる本物の奉仕であったことを物語っていると思います。イエス様は山上の垂訓で次のようにおっしゃっています。

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠

**しもべが言いつけられたことを
したからといって、
そのしもべに感謝するでしょうか。
（ルカ　17・9）**



主が喜ばれる女性たちの働き

**れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。
（マタイ　6・1～4）**

イエス様はここで、パリサイ人のような偽善の行為を非難しておられます。同じ行為でも、イエス様への愛から、自発的に行われる奉仕と、他人に見られたくて、他人から褒められたくてする奉仕とは全然違うということです。隠れた所で見ておられる主への関心よりも、報いを得たいという自分自身への関心の方が強くなりますと、パリサイ人と同じになります。これに対して、真のキリスト者は、神様だけに、イエス様だけに目を向けています。そして、神の国のご支配に目が開かれていますから、すべてが神から来ている、すべては神の恵みであり、神の贈り物である、と受け止めて、すべてに感謝することができます。いろいろなご奉仕についても、奉仕できることを感謝します。誇ることなどできません。「あの人は奉仕をしていない」などと他人をさばくこともできません。

私たちが主のために何かをしたとき、それはすべきことをしたに過ぎません。私たちは神の僕です、と聖書は言っています。

**しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。
（ルカ　17・9、10）**

イエス様につき従っていた多くの女性たちもみな、「私たちは役に立たないしもべです」という謙遜の心をもって仕えていました。だから「目立たない奉仕」、祝福される奉仕を続けることができたのではないでしょうか。私たちの集会でも、多くの姉妹がたが目立たないご奉仕をしてくださっています。未信者のお友達をそっと集会に連れてくる姉妹、入院した信者のお見舞いに行ってそのことを他人に話さないでいる人、集会の行事には参加できないけれどもその集いのために陰で祈ってくださっている方、多くの方のために毎朝毎晩とりなしの祈りを続けている方などなどです。

でも、私たちのうちには肉の性質がひそんでいますから、いつも「主が喜ばれる奉仕、行ない」をできるとは限りません。また、いつの間にかイエス様から目が離れている自分に気づかされることもあります。創世記に出ている、アダムに助け手として与えられたエバも、アダムの足を引っ張る行いをしてしまいました。蛇にそそのかされて禁断の木の実を食べ、いっしょにいた夫にも与えました。蛇の巧みな誘いの言葉に惑わされて、何よりも大切な神様の戒めをおろそかにしてしまったのです。

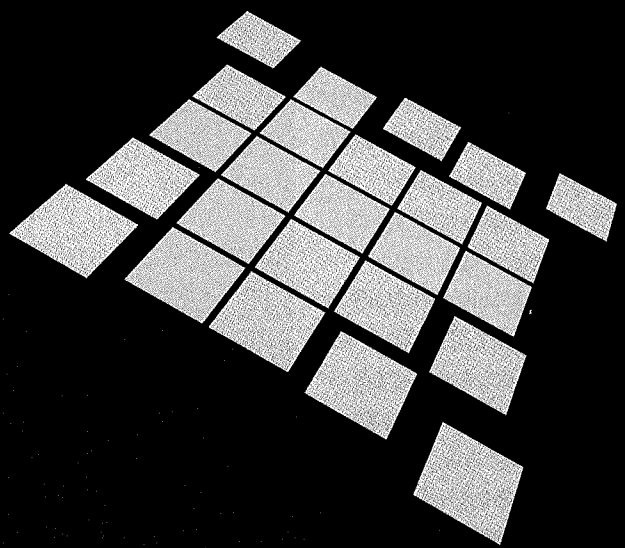
私にも助け手が一人いて、確かに助け手となってくれることがあります。特に、メッセージ当番で地方に出かけたときに、そう感じます。交わりのときに助け手となってくれるからです。交わりが苦手、特に姉妹との交わりが苦手な私にとっては大変助かります。

しかし、人間は弱い者ですから、エバがアダムに禁断の木の実を与えてしまったように、集会の中の助け手が、助け手でなくなることも起こり得ます。ある場合、助け手ではなく裁き手になったり、支配者になったりすることがないとは限りません。集会の女性がたの中にも、なかなか主人に従えない、つい裁いてしまう、なかば無意識のうちに主人を支配していた、といった経験をお持ちの方がいるのではないでしょうか。

妻が夫を裁く場合は、ご主人への愛と言いますか、もっとしっかりした信仰を持ってほしい、という願いに基づいていることが多いと思いますが、助け手は助け手にとどまっているべきではないでしょうか。これは、あるテレビの音楽番組でバイオリンソナタの演奏を見たときのことですが、主役のバイオリン演奏よりもピアノ伴奏の素晴らしさに感動しました。そのピアノ伴奏者は、バイオリン演奏をひきたてることに神経を集中して脇役に徹していました。その姿がなんとも優雅に感じられたのです。同じように助け手は助け手に徹することによってこそ、イエス様の光をより強く放つことができるのではないでしょうか。

それから、もう一つ「イエス様が喜ばれる行ない」に関して教えられるのがマルタとマリヤの話です。

「主よ。
妹が私だけにおもてなしをさせているのを、
何ともお思いにならないのでしょうか。
私の手伝いをするように、
妹におっしゃってください。」
（ルカ　10・40）



主が喜ばれる女性たちの働き

イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」（ルカ　10・38〜40）

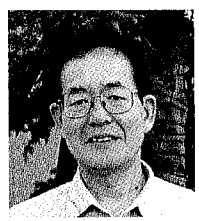
マルタは心からイエス様を愛していましたし、イエス様を接待する労苦を進んで引き受けました。しかし、しばらくするうちに、「イエス様への愛から奉仕をさせていただいている」という最初の思いがどこかへ行ってしまった。そして、もてなしの作業を負担に感じるようになると、自分のやっていることが「何よりも大切なこと」のように思えてきて、それに比べて「マリヤはどうか。何もしないでイエス様の足元に座り込んだままではないか」と、マリヤへの不満を訴えたのだと思います。

しかし、イエス様は「それは間違っているよ」とさとされました。イエス様の教えを聴き、みこころを心に刻むことこそ必要な行為であり、「彼女（マリヤ）からそれを取り上げてはいけません」とイエス様は言われました。

マルタのような失敗をする恐れは私たちの集会でも起こり得るのではないでしょうか。神から目が離れて、関心が人間に向かってしまいますと、「あの人以上に主に用いられたい」とか、「自分が中心になりたい」という思いにまでつながって、集会の秩序を乱す、ときには分裂をもたらす恐れがないとは言えません。

集会でのご奉仕は実にさまざまです。見える行いもあれば、見えない行いもあります。雑用に汗を流すこと以外に、集会のために祈ることも、遠方から集会に参加することも、主が喜ばれる行いという意味で「奉仕」と言っていいのではないでしょうか。からだの丈夫な人もいれば弱い人もいます。時間に余裕のある人、ない人がいます。何もできずに感謝して喜びをいただいている人もいます。それぞれにできることをする。主のため、集会のために犠牲を払うこと、自分を消耗させることは大切ですが、無理をして頑張るのはどうでしょうか。やっていることに負担を感じるようになったら、身を引くのも自由でしょうし、自分がやらなければとか、自分でなければ、と過度に自分の役割を意識して頑張る必要もないと思います。そして、そうした自由の中で、女性たちが自発的に、喜んで「主のご用」のために働いてくださるとき、主はその行いを大いに喜ばれ、祝福してくださるに違いありません。

清水洋一
1936年東京生まれ。毎日新聞客員編集委員。新宿高、東京大学理学部卒。





あなたは高価で尊い

**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。
それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、
永遠のいのちを持つためである。
（ヨハネ 3・16）**

1 捜し歩く神様

あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの1匹をなくしたら、その人は99匹を野原に残して、いなくなった1匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない99人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。（ルカ 15・4〜7）

羊は,とてもか弱い動物のようです。基本的に群れをなして助け合って生活をしていますが、何らかの事情により、1匹だけ群れから離れると,なかなか生き延びられないそうです。群れから離れた1匹が、まちがって藪の中に入ってしまい、どこかの枝にでもひっかかると、そのまま抜け出られずに死んでしまうということもあるようです。

迷い出た1匹の羊を見つけるまで捜し歩く羊飼いのように、神様は,神様の基準から迷い出ている私たち罪人を一生懸命捜し歩いてくださると言っておられます。

どうして神様は私たちを一生懸命捜し歩くのでしょうか。それは、私たちに無限の価値を見いだしてくださって,心から愛してくださるからです。

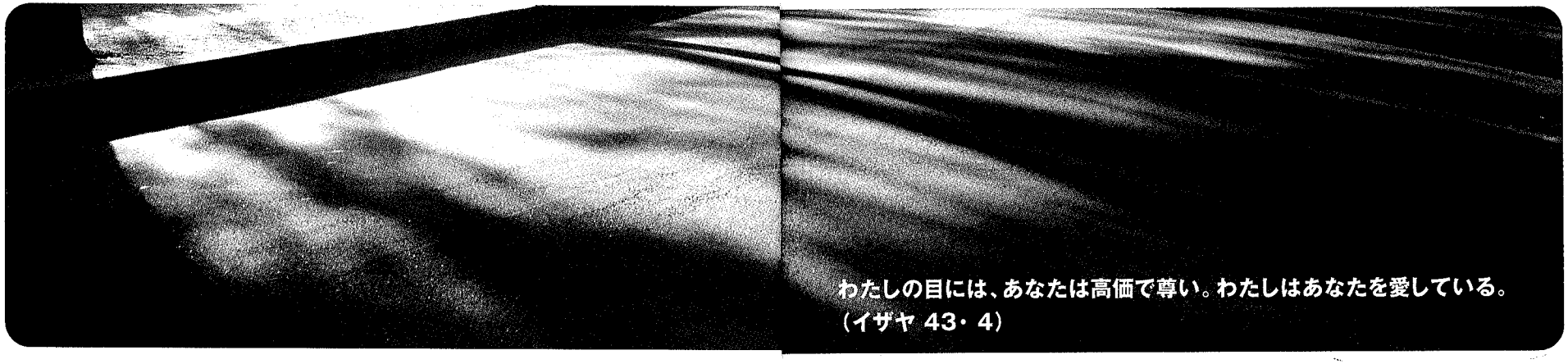
**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
（ヨハネ 3・16）**

神様は,私たちが滅びないように、イエス様をこの世に与え、十字架にまで掛けてくださいました。それは、私たちに対する深い神の愛によるものだと聖書は言います。
羊のたとえは,私たちが滅びることなく、永遠のいのちを持つために、神様が私たちひとりひとりを捜し求めてくださるのです。

2 99匹を野原に残して

いなくなった1匹を捜し求めるためとはいえ、99匹を野原に残しておくと、その99匹は大

あなたは高価で尊い



わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
（イザヤ 43・4）

変危険な状況に置かれることになります。捜しに行っている間に、野獣が来て99匹を襲ったらどうするのか。99匹の中からまた迷い出る羊がいたらどうするのか。そう考えると、1匹はたしかに貴重だけれど、残りは99匹もいるのだから、見殺しにするほかない。全体を守るためには1匹くらいは仕方ない、そう考えることもできます。

このような考え方は一見合理的なように見えます。そして、このような考え方は私たちの生活する社会ではよく見られることです。企業の業績が悪化すると、組織全体を守るという名目でリストラが行われるのは、その一例といえるでしょう。多数の意見の前には少数意見がないがしろにされても仕方ないと思わざるをえない場面もよくあります。

ところが、この考えには大きな落とし穴があります。この考えに従って、上林順一郎氏がその著書「なろうとしてなれない時」で指摘されたように、羊が次から次へいなくなると仮定してみましょう。

1匹いなくなると、99匹の方が多いのでそちらを守るためには1匹失われても仕方がないと考えます。

次の1匹がいなくなると、残り98匹の方が多いのでそちらを守るためには1匹失われても仕方がないと考えます。

同様に次の1匹、次の1匹…と順に減っていき、残り50匹のうち1匹、残り10匹のうち1匹、残り3匹になってもまだ、残りは2匹で、こちらが多いのでそちらを守るためには仕方がない、と考えます。さて、最後の2匹が残りました。このうち1匹がいなくなります。さて、どうするか。いなくなった1匹を捜しに行くべきでしょうか、それとも残った1匹を守るべきでしょうか。

この羊飼いは、ここに至って初めて気づきます。数の多い方を守ることが大切で、いなくなった1匹を見捨てても仕方ないと思ったが、実は、自分は単に数の多さを気に掛けてきただけで、どの1匹も大切に思っていなかったということを。数が多いから大切、組織全体のためだからという考え方は、実は本当はひとりの人間、ひとつの魂のことなんか全く考えていないということが明らかになるわけです。

ひとつの魂を本当に大切に思うイエス様は、残り99匹を野原に残しておいても、失われた1匹を捜しに行かれるのです。

3 おまけのスズメさえも

イエス様が弟子たちを宣教に遣わすにあたって、「あなたがたは父である神様の完全な守りのうちにあるのだから心配しなくてよい」と、言われた箇所があります。どんな小さなことでも、神様はよくご存じの上で配慮してくださる、と聖書にはありますが、その例として、2つの箇所を読んでみましょう。

2羽の雀は1アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の１羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。（マタイ 10・29）

2羽が1アサリオンで買えるとあります。アサリオンは、最小単位の銅貨だそうですから、今の貨幣価値でいえば1円とか2円とかの非常に安い値段です。これと同じ内容の記事が、ルカの福音書にもあるのですが、値段が少し違っています。

5羽の雀は２アサリオンで売っているでしょう。そんな雀の１羽でも、神の御前には忘れられてはいません。（ルカ 12・6）

お気づきでしょうか。1アサリオンで2羽買えるのなら、2アサリオンで4羽買えるはず。ところが、ルカでは5羽買えるとあります。つまり、1羽はおまけなのです。ええい、まとめて2アサリオンなら、1羽まけとくよ！　というわけです。今で言えば、「ユニクロのポロシャツ2枚まとめ買いセール」といった感じでしょうか。

アサリオン自体、最小単位銅貨ですから、とても小さな価値です。その1アサリオンで2羽も買えるスズメのなかでも、さらにおまけで

ついてきた1羽。誰からも重要視されず、単なる数合わせのために加えられた、スズメの1羽。そんなおまけの1羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません、そんなスズメの1羽でも、神の御前には忘れられていないのだと聖書は言います。そうだとすれば、ましてや、私たちひとりひとりは,父なる神が生活の隅々にまで目を配って、その歩みを見守ってくださっている、私たちは決して忘れられることはなく、常に神様の御前に覚えられているのです。

ほとんど価値がないと思えるようなスズメの1羽に対して、神はこれほどまでに価値を見いだしてくださるのだから、なおさら私たちひとりひとりに対しては、無限の価値を見いだしてくださると聖書は言います。どうして私たちにそのような価値があるのでしょうか。それは、神がその愛情を注ぐ対象として人間を創ってくださったからです。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(イザヤ 43・4)

4 主に忘れられたと思うとき

このように、イエス様が私のことを深く愛してくださることがわかっているつもりなのに、時として、そのことがわからなくなり、もしかすると、イエス様は自分のことなど忘れてしまわれたのではないかと思うことがあります。ダビデは、主とともに歩んだ人でしたが、その彼でも詩篇にそのような心境を述べています。

主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょう。私の心には、一日中、悲しみがあります。いつまで敵が私の上に、勝ちおごるのでしょう。私に目を注ぎ、私に答えてください。私の神、主よ。私の目を輝かせてください。私が死の眠りにつかないように。また私の敵が、「おれは彼に勝った。」と言わないように。私がよろめいた、と言って私の仇が喜ばないように。(詩篇 13・1〜4)

ダビデに「あなたは私を永久にお忘れになるのですか」とまで言わせた事情は何だったのでしょうか。はっきりとは書いてありませんが、それは,彼が死の恐怖に直面したからではないでしょうか。3節で「死の眠りにつかないように」とあるので、彼は死を目前に、現実のものとして強く意識していたのではないかと推測できます。

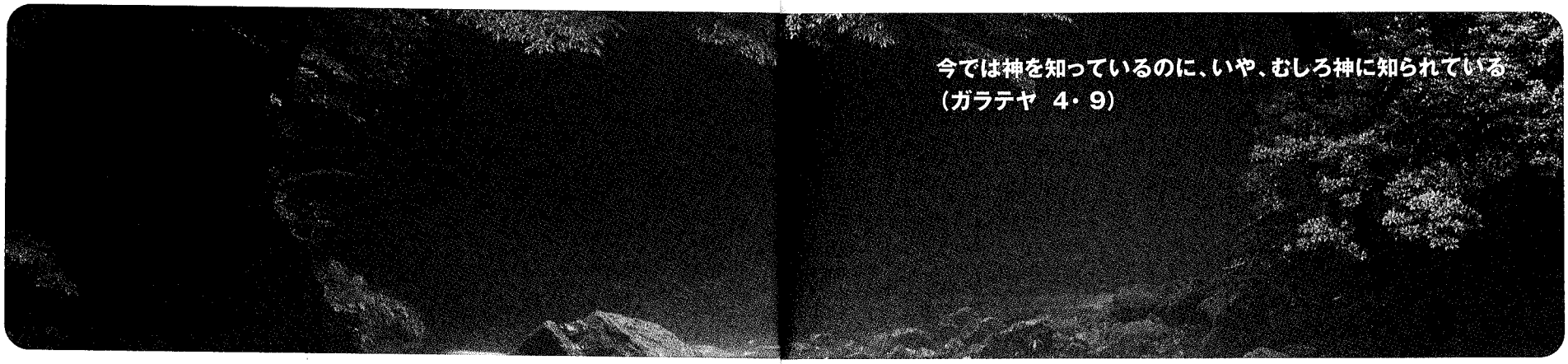
ダビデは,親友のヨナタンを失い、部下を失い、家族を失って、ただひとり主の前に死を覚悟したとき、頼れるものは神様だけと知りました。すべてを失ってただひとり神の前に出たときに、もしかすると、主がわたしのことを「永久に忘れた」のではないかと思い始めたのではないでしょうか。

私たちは「忘れられること」に敏感です。忘れられることに恐怖を覚えることすらあります。私たちは忘れられないために、年賀状をやりとりし、頻繁にメールを送って誰かとつながっていることを確認しています。それは周囲から忘れられて、孤独になるのを恐れるからです。

そして、もし「自分の存在が永遠に忘れ去られるかもしれない」と思うと,それに耐えられなくなってしまいます。他人から無視される、忘れ去られるのは,つらい経験です。たとい今は、自分の存在を認めてくれる家族,兄弟姉妹、好意的な友人がいるから何とか生きていけるかもしれない。しかし,いつかはすべての人に忘れ去られる。その日が必ず来る。自分の生きてきた証(あかし)をすべて失う日が来る。そう考えると、いてもたってもいられなくなります。

人は,自分の生きてきた証を残すために、





いろんな努力をします。財をなした人であれば、死んでも名を残すために記念の建築物を建てたり、寄付をしたりします。子供を残すのは生きてきた証を残す努力のひとつといえるかもしれません。自分がいずれこの世からいなくなることを意識すると、何かを残していきたい。「自分が忘れられない」ために、いろんな努力をします。しかし、それはむなしい努力にすぎません。いくらがんばっても永遠に自分の存在をこの世に残すことはできないのです。

ダビデの子、ソロモンは、この世で栄華の限りをつくした人でしたが、「この世は空の空である」と言い、その一つの例として、すべてが記憶されないことをあげています。

先にあったことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、それから後の時代の人々には記憶されないであろう。（伝道者 1・11）

他人から忘れ去られることは淋しいことですが、それよりもっとやっかいな問題があります。それは、自分が他人に忘れられるばかりか、自分で自分のことを忘れてしまうかもしれないということです。

最近は「認知症」というソフトな言い方になりましたが、いわゆる痴呆を恐れる人は多いようです。それは、周囲に迷惑をかけたくない、恥を見せたくないという気持ちによるのは確かですが、その根底には、自分で自分のことが分からなくなることの恐れがあるのはまちがいありません。周囲に忘れられるだけでなく、もしかしたら、自分で自分のことを忘れてしまうかもしれない。思えば、それほど私たちは小さな存在だということに気づかざるをえません。

このような小さな存在である私たちのことも、神様は覚えていてくださいます。自分はこの世に生まれる以前の永遠の昔から知られていたし、自分が死んだ後も、永遠に覚えられているのだ、そのような存在が私を愛していてくださるのだと聖書は言います。このような方がいてくださるということのみが、永遠に忘れ去られることの恐怖から私たちを救ってくれるのではないでしょうか。

私たちは、過去も未来も超越して、主なる神様によって永遠に知られているので、決して忘れ去られることはありません。たとい、親しい者たちが自分を忘れても神は私を覚えていてくださる。たとい、自分で自分のことがわからなくなっても主はともにいてくださる。神は決して私を見捨てず、私を忘れない。神に知られているとの確信がある限り、平安のうちに守られます。

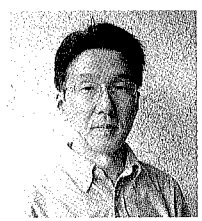
主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル 13・5）

今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに…（ガラテヤ 4・9）

人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。（Ⅰコリント 8・2、3）

すべてをご存じの上で、私たちを神の子どもとして招いてくださっているイエス様に、悔い改めて立ち返り、主と共に歩む人生を始めてはいかがでしょうか。

秋本隆二
千葉簡易裁判所主任書記官。広島大学附属東雲小、同中、修道高、上智大



メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。（エペソ 6:18）

2007年	10月				11月				12月				
	7日	14日	21日	28日	4日	11日	18日	25日	2日	9日	16日	23日	30日
北海道	重田H	川股	藤原N	芳竹	片桐	岩崎	中山Y	岩本	藤本	羽石	菅原	岡本M	白石K
青森		棚村		佐山	藤田E			福島		大場		中山Ch	
仙台／盛岡	増森	松見	松田	福島	深沢	高田	奥	立之	片桐	小池	藤田E	菊池	高田H
新潟	江藤	黒沢	山下	重田H	北原T	富田	山徳	岩崎	鈴木T	松下	清水Y	長岡	片桐
宇都宮	谷口	藤井	金井	中込	羽石	芳竹	滝	川股	吉田	鈴木H	野田	松見	斉藤
日立	岩本	柿沼Y	上田	平山	和田S	藤田E	羽石	吉田	棚村	田中J	松見	南村	槇野
土浦	小川	秋本	松見	大場	蘇畑	青木	北原	稲森	小野沢	和田S	平山	浅野	南村
川越	野田	重田S	岩本	古田K	代田	野口T	江田	白石Y	飯島H	平山	大庭	上野	御任
春日部	藤井	辻田H	鈴木H	小々馬	川股	黒澤	飯島H	大庭	水渡	宮田	西村	吉田	上田
印旛／鹿島	青柳	藤田T	川股	松尾	山口I	末村	宮田	伊牟田	槇野	白石Y	染野	江田	会沢
市川	小池	大場	小山	滝	会沢	伊牟田	青柳	柿沼Y	大沢A	飽戸	田尾	水渡	小川
東京 10:30	酒井Ch	野田	白石K	青柳	ベック	飽戸	平山	重田S	辻田H	江藤	西川	寺田	清水Y
東京 14:00	黒澤	中込	浅野	古屋	中山Ch	藤本	松田	野口O	小々馬	柿沼Y	佐山	田中J	富岡
東京 19:00	小島	水渡	染野	松見	久田	岡本M	古田K	古田稔	蘇畑	石塚	中村	野口H	奥
横浜	兵藤	酒井M	牧野	香川	大須賀	和田S	中山Ch	山本	古川	和田Y	菊池	黒田	山田K
相模原	神沢	黒田	江藤	石井A	後藤T	古川	菊池	旭	立之	重田S	牧野	大高	水渡
御代田	長岡	織田	平井	末永	岩崎	植原	キャンプ	松下	江田	野口O	羽石	ベック	キャンプ
伊那	植原	熊谷	長岡	松下	平井	江田	キャンプ	羽石	田中J	末永	山田M	織田	キャンプ
富山	織田	仲井間	野口O	松本Y	藤本	浅野	旭	瀬川	平	平井	和田Y	山下	大下
高山	平		大下				大下		植原		長岡		
伊豆	加藤S		菊池		加藤S		福島		青柳		兵藤		加藤S
藤枝		内藤		野田		小林		岩下		金子		青柳	
掛川	大塚		秋本		金子		染野		岩上		水渡		
名古屋／豊橋	辻田H	今村	那須	和田S	津田	田中J	和田Y	長岡	上田	滝	会沢	辻田M	松本S
石川／福井		長岡		植原		山徳		平		長岡(8)		植原	
近江八幡	高村	古田K	高村	藤原T	高村	河辺	高村	平山	キャンプ	青柳	吉田	岩崎	高村
大阪	森島	瀬川	小久保	山科	広田	藤原T	池島	高橋Y	キャンプ	岡本M	寺田	山徳	中山K
芦屋	松田	松井	瀬川	渡辺S	富田	小久保	清水Y	高村	キャンプ	森島	滝	久田	藤原T
西神	久田	渡辺S	岡本M	岩崎	池島	森島	中山K	元永	キャンプ	吉田	富田	藤原N	瀬川
島根	藤本		黒田R		福代		岩崎		瀬島		藤井		
山口／広島／徳山	渡部	中山K	森島	瀬島	香川	森田	児玉	上田	広田	芳我	岡本M	秋本	山口H
岡山	広橋	久田	平山	岩下	内田H	内藤	渡辺S	藤原T	岩本	鈴木T	武井	後藤T	内藤

メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エ ペソ 6:18)

2007年

	10月				11月				12月				
	7日	14日	21日	28日	4日	11日	18日	25日	2日	9日	16日	23日	30日
徳島	池田	浅野	山本	野田F	小島	広橋	伊野	平井	菊池	中山K	北原	小野沢	野間
坂出	小野沢	森島	会沢	内藤	高嶋	古田K	武井	池田	野間	染野	野田F	広橋	内田H
高知	野間	岡本M	古田K	金子M	伊野	窪内	大須賀	蘇畑	池田D	脇岡	青柳	近森	岡本H
松山／西条	藤原N	近森	内藤	岩上	野田F	寺田	国川	野間	平山	北原	白石K	和田Y	光藤
福岡／別府	庄野	青柳	清水Y	浅野	和田Y	別所	小山田	松井	重枝	野田	江藤	今村	中野
長崎／佐世保	別所	小池	中込	松田	庄野	菅原	加藤M	辻田M	石井A	辻田H	上田	山口H	重枝
宮崎／小林	平山	武井	山口H	菊池	桜本	加藤M	河辺	藤原N	羽石	菅原	田中J	別所	高橋I
鹿児島／熊本	小山田	須藤T	重枝	庄野	菊池	和田Y	別所	古田K	岩崎	古田M	上野	北原	加藤M
沖縄／宮古	芳竹	平良K	白石Y	小島	飯守	キャンプ	平良M	代田	仲井間	蘇畑	岩崎	飽戸	喜屋武
バンコク													
米国								キャンプ					

2008年

	1月				2月				3月				
	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日	2日	9日	16日	23日	30日
北海道	重田H	川股	藤原N	芳竹	片桐	岩崎	中山Y	岩本	藤本	羽石	菅原	岡本M	白石K
青森		棚村		佐山	藤田E			キャンプ		大場		中山Ch	
仙台／盛岡	増森	松見	松田	福島	深沢	高田	奥	キャンプ	片桐	小池	藤田E	菊池	高田H
新潟	江藤	黒沢	山下	重田H	北原T	富田	山徳	岩崎	鈴木T	松下	清水Y	片桐	長岡
宇都宮	谷口	藤井	金井	中込	羽石	芳竹	滝	川股	吉田	鈴木H	野田	松見	斉藤
日立	岩本	柿沼Y	上田	平山	和田S	藤田E	羽石	吉田	棚村	キャンプ	松見	南村	槇野
土浦	小川	秋本	松見	大場	蘇畑	青木	北原T	稲森	小野沢	キャンプ	平山	浅野	南村
川越	野田	岩上	岩本	古田K	代田	野口T	江田	白石Y	飯島H	平山	大庭	上野	御任
春日部	藤井	辻田H	鈴木H	小々馬	川股	黒澤	飯島H	大庭	水渡	宮田	西村	吉田	上田
印旛／鹿島	青柳	藤田T	川股	松尾	山口I	末村	宮田	伊牟田	槇野	白石Y	染野	江田	会沢
市川	小池	大場	小山	滝	会沢	伊牟田	青柳	柿沼Y	大沢A	飽戸	田尾	水渡	小川
東京 10:30	酒井Ch	野田	白石K	青柳	ベック	飽戸	平山	江藤	辻田H	清水Y	西川	寺田	重田S
東京 14:00	黒澤	中山Ch	浅野	古屋	中込	藤本	松田	野口O	小々馬	柿沼Y	佐山	田中J	富岡
東京 19:00	小島	水渡	染野	松見	久田	岡本M	古田K	古田稔	蘇畑	石塚	中村	野口H	奥
横浜	兵藤	酒井M	牧野	香川	大須賀	和田S	中山Ch	山本	古川	和田Y	菊池	黒田	山田K
相模原	神沢	黒田	江藤	石井A	後藤T	古川	菊池	旭	立之	重田S	牧野	大高	水渡
御代田	長岡	織田	平井	末永	岩崎	植原	羽石	松下	江田	野口O	キャンプ	平山	飽戸

メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エ ペソ 6:18)

2008年	1月				2月				3月				
	6日	13日	20日	27日	3日	10日	17日	24日	2日	9日	16日	23日	30日
伊那	植原	熊谷	長岡	松下	平井	江田	小野沢	羽石	田中J	末永	キャンプ	織田	山田M
富山	織田	仲井間	野口O	松本Y	藤本	浅野	旭	瀬川	平	平井	和田Y	山下	大下
高山	平		大下				大下		植原			長岡	
伊豆	加藤S		菊池		加藤S		福島		青柳		兵藤		加藤S
藤枝		内藤		野田		小林		岩下		金子		青柳	
掛川	大塚		秋本		金子		染野		岩上		水渡		
名古屋／豊橋	辻田H	今村	那須	和田S	津田	田中J	和田Y	長岡	キャンプ	滝	会沢	辻田M	松本S
石川／福井		山徳		平		長岡		植原		山徳		平	
近江八幡	高村	古田K	高村	藤原T	高村	河辺	高村	平山	高村	青柳	吉田	岩崎	高村
大阪	森島	瀬川	小久保	山科	広田	藤原T	池島	高橋Y	小島	岡本M	寺田	山徳	中山K
芦屋	松田	松井	瀬川	渡辺S	富田	小久保	清水Y	高村	野口O	森島	滝	久田	藤原T
西神	久田	渡辺S	岡本M	岩崎	池島	森島	中山K	元永	山科	吉田	富田	藤原N	瀬川
島根	藤本		黒田R		福代		岩崎		瀬島		藤井		
山口／広島／徳山	渡部	中山K	森島	瀬島	香川	森田	児玉	上田	広田	芳我	岡本M	秋本	山口H
岡山	広橋	久田	平山	岩下	内田H	内藤	渡辺S	藤原T	岩本	鈴木T	武井	後藤T	内藤
徳島	池田	浅野	山本	野田F	小島	広橋	伊野	平井	菊池	中山K	北原	小野沢	野間
坂出	小野沢	森島	会沢	内藤	高嶋	古田K	武井	池田	野間	染野	野田F	広橋	内田H
高知	野間	岡本M	古田K	金子M	伊野	窪内	大須賀	蘇畑	池田D	脇岡	青柳	近森	岡本H
松山／西条	藤原N	近森	内藤	岩上	野田F	寺田	国川	野間	平山	北原	白石K	和田Y	光藤
福岡／別府	庄野	青柳	清水Y	浅野	和田Y	キャンプ	小山田	松井	重枝	野田	江藤	今村	中野
長崎／佐世保	別所	小池	中込	松田	庄野	キャンプ	加藤M	辻田M	菅原	辻田H	上田	山口H	重枝
宮崎／小林	平山	武井	山口H	菊池	桜本	キャンプ	河辺	藤原N	羽石	菅原	田中J	別所	高橋I
鹿児島／熊本	小山田	須藤T	重枝	庄野	加藤M	キャンプ	別所	古田K	岩崎	古田M	上野	北原	加藤M
沖縄／宮古	芳竹	平良K	白石Y	キャンプ	飯守	清水Y	平良M	代田	仲井間	蘇畑	岩崎	飽戸	喜屋武
バンコク													
米国													キャンプ

祈り会

2007年	10月				11月				12月			
4日	11日	18日	25日	1日	8日	15日	22日	29日	6日	13日	20日	27日
山徳 詩篇 71·9~14	和田S 15~20	小野沢 21~24	青柳 72·1~8	重田H 9~17	清水Y 18~20	小島 73·1~12	岡本M 13~20	山田 21~28	芳竹 74·1~9	牧野 10~17	佐山 18~21	山本 22、23
2008年	**1月**				**2月**				**3月**			
3日	10日	17日	24日	31日	7日	14日	21日	28日	6日	13日	20日	27日
山徳 75·1~5	和田S 6~8	小野沢 9~10	青柳 76·1~7	藤本 8~10	重田H 11~12	清水Y 77·1~3	小島 4~12	岡本M 13~20	芳竹 78·1~8	牧野 9~16	佐山 17~22	山本 23~31

2008年 よろこびの集い スケジュール

2007
12月　29(土)～ 1 (火)　御代田

2008
1月　26(土)～27(日)　沖縄

2月　9 (土)～10(日)　福岡
23(土)～24(日)　仙台

3月　1 (土)～ 2(日)　名古屋
8(土)～ 9(日)　大洗
14(金)～16(日)　御代田
26(木)～31(月)　バンクーバー

4月　5(土)～ 6(日)　大阪/ 神戸
12(土)～13(日)　熊本
18(金)～20(日)　御代田
26(土)～27(日)　松山

5月　3(土)～ 5 (月)　御代田
10(土)～11(日)　札幌
17(土)～18(日)　富山
28(水)～ 6 /4(水)　ミヘルスベルグ

6月　5(木)～12(木)　ミヘルスベルグ

7月　12(土)～13(日)　岡山
18(金)～20(日)　御代田
25(金)～27(日)　御代田

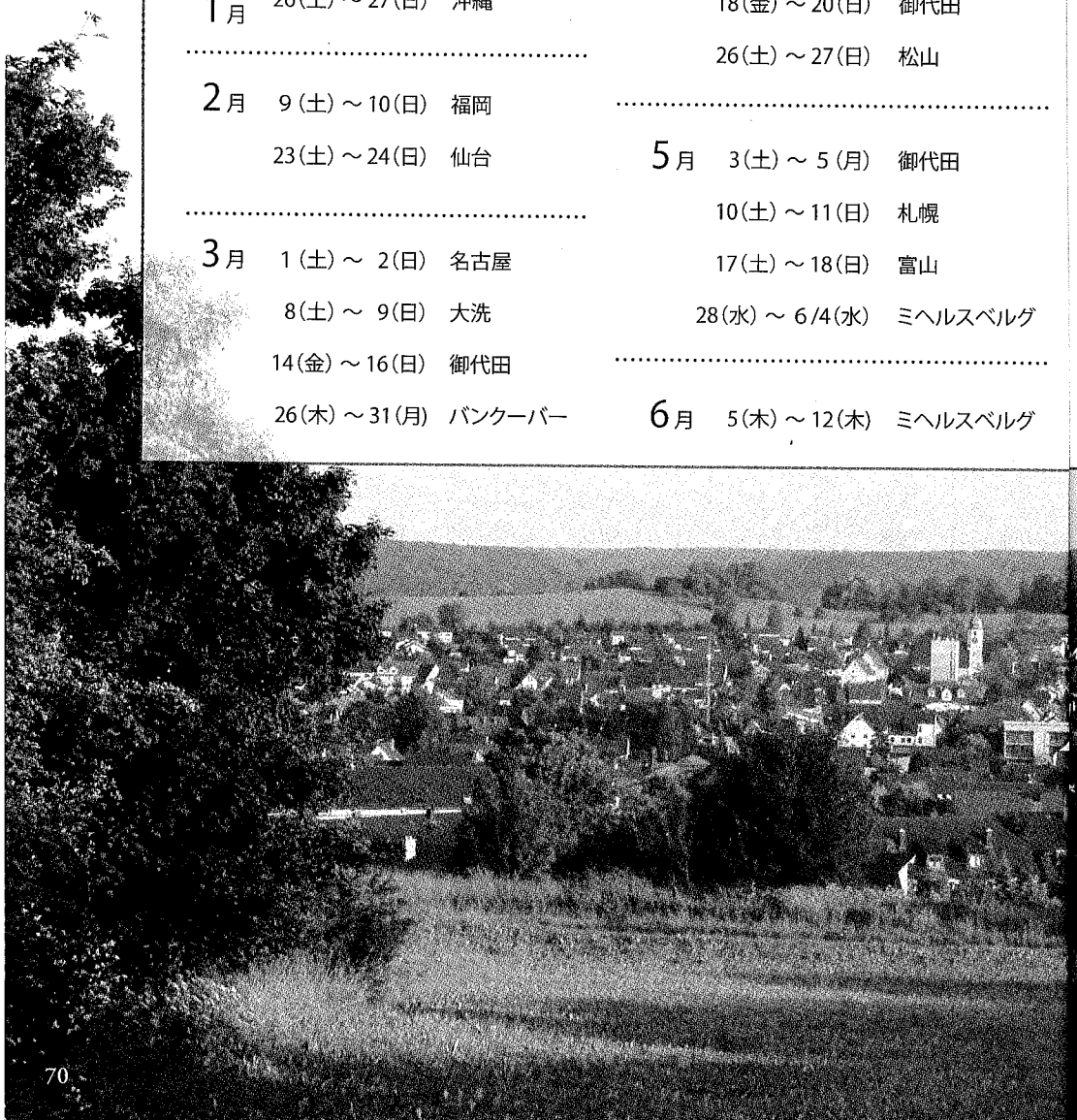
8月　1 (金)～ 3(日)　御代田
8(金)～10(日)　御代田
15(金)～17(日)　御代田
22(金)～24(日)　御代田
30(土)～31(日)　石川/ 福井

9月　6(土)～ 7(日)　広島
13(土)～14(日)　盛岡
19(金)～21(日)　御代田
27(土)～28(日　別府

10月　8(水)～15(水)　フィリンゲン
16(木)～23(木)　フィリンゲン

11月　8(土)～ 9(日)　沖縄
14(金)～16(日)　御代田
21(金)～26(水)　ロサンゼルス

12月　6(土)～7(日)　近江八幡
31(水)～1/2(金)　御代田







どうしたら天国に行けるのか？

ある外国人キリスト者から―

ヴェルナー・ギット

筆者のヴェルナー・ギット博士は情報理論を専門とする工学者で、熱心なキリスト者として知られる方です。情報理論などに基づいて「聖書は神の言葉である」と主張する文書などを著し、ご自分のホームページを用いてイエス様を宣べ伝える活動もしています。このほど同博士の聖書メッセージ（ドイツ語）の日本語翻訳について、当集会が相談を受けたこともあって、その一部をここに紹介させていただきました。

「永遠」について考える人は、そう多くありません。
人は時々、「死」については考えますが、「死後」に何が起こるかまでは考えません。

ある有名なアメリカの女優さんは、28歳のときにこう言いました。「うちの猫より先に、私が死んだら、私の遺灰を猫に食べさせて。そうすれば、私は猫の中で生き続けることができるわ」。何と恐ろしい、愚かで短絡的な考えでしょう。

イエス様が生きておられた時、大勢の人々が悩みを抱いてやってきました。
その悩みの多くは、遠い未来のことではなく、その日の、目の前の悩みでした。

- 十人のらい病人が、病気を治してもらいたいと願いました。参照→(ルカ17・12)
- ふたりの盲人が、目が見えるようになりたいと願いました。→(マタイ9・27)
- 群衆のひとりが、遺産相続の調停をしてほしいと願いました。→(ルカ12・13)
- パリサイ人たちがイエス様を陥れるために、「カイザルに税金を納めるべきかどか」質問しました。→(マタイ22・17)

これらは切実な問題でした。しかし長い目で見てはるかに大事なこと、「どうしたら天国に行けるのか」について、イエス様に尋ねる人はほとんどいませんでした。でも、ある金持ちの役人はイエス様に尋ねました。

「私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか」　(ルカ18・18)

それに対するイエス様の答は、「持ち物を全部売り払って、私についてくるように」でした。彼は大金持ちだったので、悲しみながらもイエス様の仰せに従うことができず、天国に入る機会を逃してしまいました。

一方、聖書には、天国を捜し求めてはいなかったが、イエス様によって天国の存在を知り、天国に行くチャンスを得た幸せな人物が記されています。ザアカイはイエス様に会いたいと熱心に願いましたが、イエス様に会えたばかりか、それ以上のすばらしいものを手に入れました。イエス様は彼の家に泊まられ、親しく語ってくださり、そしてザアカイは、天国を見出したのです。イエス様のお言葉。



「きょう、救いがこの家に来ました」
（ルカ19・9）

どうしたら天国を見つけられるでしょうか？

天国、つまり天の御国については、次のように言うことができます。

天の御国は、いつでも見出すことができます。このことは、読者のみなさんもまた、今日にでも「永遠のいのち」を手に入れることができる、ということを意味しています。

天の御国は、良い行ないによっては手に入れることはできません。

天の御国は、何の準備もなく、手に入れることができるのです。

私たちはどうしたら天国に行けるかと、自分勝手にあれこれと考えますが、天地を創造した神様の言葉に基づかない考えは、すべて間違いです。

間違いの例を二つあげましょう。ある有名な歌手は、サーカスを引退する道化師のために、「彼は道化の演技を通して多くの人々を幸せにした。だからきっと天国に行くだろう」と歌いました。

また、ある金持ちの女性は、二十人の女性が無料で住める大きな家を建てました。そこに住むための条件はただ一つ、金持ちの女性の霊的な救いのため（つまり天国に行けるために）、毎日１時間祈り続けると約束することでした。これらの考えが誤りであることは言うまでもありません。

では、私たちは一体何をすれば、本当に天国に行けるのでしょうか？

イエス様はこのことを説明するために、宴会のたとえ話をなさいました→（ルカ14章16節）**ある人がすばらしい宴会を催したいと考え、多くの人々を招いたのですが、その招きを断る人々が多かったのです。**断る理由は、「畑を買ったので」→（18節）、「牛を買ったので」→（19節）、「結婚したので」→（20節）などというものでした。

この「ある人」とは、イエス様のことです。そしてイエス様は、このたとえ話を、次のような言葉で締めくくっておられます。**「言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです」**
→（24節）

このたとえ話が示しているように、私たちは、イエス様の招きを受け入れて天国に入れるか、それとも招きを拒絶して天国を失うかのどちらかです。肝心なのは、「あなたが」天国への招きを受け入れるか、それとも断るか、です。なんと簡単で、容易なことではありませんか。

時が来て、悲しいことにあなたが天国に入るのを拒絶されるなら、それはあなたが「天国への道を知らなかった」からではなく、あなたが「イエス様の招きを受け入れなかった」からです。上記のたとえ話に出てくる、招きを断った三人は、悪いお手本です。なぜなら三人とも、宴会への招きを理由をつけて拒絶したからです。

では、このイエス様の宴会は、断る人々が多くて中止になったのでしょうか？

いいえ、そうではありません。招きを断った人々が出たので、宴会の主人はひろく世界中の人々に招待状を出しました。今度は特別な招待状ではなく、単に、「来なさい！」と呼びかれられたのです。この招きを受け入れた人々は誰でも、宴会の席を与えられました。そして大勢の人々がやってきました。それでもまだ席があるのを見た主人は、しもべに言いました。**「街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい」→（23節）**

このたとえ話は、現在の私たちとどのような関係があるのでしょうか？

天国にはまだ場所があり、イエス様はあなたにつぎのように呼びかけておられます。「来て、天国のあなたの席に着きなさい。正しい判断を下し、あなたの永遠の場所を予約しなさい。今日、そのことをしなさい」。

天国はすばらしい所です。だからこそ、イエス様は宴会にたとえ、私たちを招いておられます。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。（1コリント2・9）

どうしたら天国にいけるのか？

この地上では、天国に似た所は、どこを探しても見つかりません。天国とはそれほどすばらしい所です。天国を逃すわけにはいかないのです。信じられないほど貴いお方、神の子であるイエス様は、私たちのために天国への道を開いてくださいました。そして私たちが容易に天国に行けるようにしてくださったのです。

私たちがしなければならないたった一つのことは、ただ「天国に行きたいと願うこと」だけです。
先ほどのたとえ話に出てきた人々のように「近視眼的」でない限り、神様からの招きを断れる人はいないはずです。

イエス様を通しての救い、天国への道。

使徒の働き2章21節は、とても重要な一節です。**「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」**
これは、新約聖書の核となる言葉です。

伝道の途中、ピリピの牢獄に囚われていたパウロは、看守にこう言いました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒16・31）

この言葉は、簡潔で革命的であり、私たちの人生を根本的に変えてしまいます。事実、看守はその夜のうちに回心し、救われたのです。
イエス様はあなたを「何から救われる」のでしょうか？　これはとても大切な質問です。
イエス様は私たちを、永遠の滅び、地獄に至る道から救い出されるのです。
聖書によると、人は天国か地獄のどちらかで永遠に過ごすことになります。天国はすばらしいが、地獄は恐ろしい所です。そしてそれ以外の選択肢はありません。
死んだらすべてが終わりだ、と考えている人々は、死んだ後、実は死が終わりでなかった、という事実に直面します。
あなたの人生はイエス様との関係によって裁かれるのです。その裁きの結果、あなたが永遠をどの場所で過ごすのかが決まるのです。

ある講演旅行でポーランドに行ったとき、私はアウシュビッツの強制収容所を訪ねました。第二次世界大戦中、アウシュビッツでは恐ろしいことが行われました。1942年から1944年の間に、第三帝国によって160万人以上のユダヤ人が殺害され、その死体は焼かれました。いわゆる「アウシュビッツの地獄」です。
一度に600人が殺されたガス室に案内されたとき、使徒の働き16章31節の言葉が頭をよぎりました。それは想像を絶する凄惨な情況だったに違いありません。
1944年にこの悪夢が終わったので、私たちはこのガス室を訪れることができます。もちろんあなたもその収容所跡を訪れることができます。今はもう、ガス室に送られたり、拷問にかけられたりする人々は誰もいません。アウシュビッツのガス室は終わったのです。



この収容所跡の博物館の入り口に、十字架にかけられたイエス・キリストの絵が掛けられています。殺されていったある囚人が、爪を壁に立てて刻み込んだイエス様の絵です。囚人はその絵を残すことによって、イエス様に対する希望をはっきりと示そうとしたのです。もちろん、この人もガス室で殺されましたが、救い主であるイエス様を知っていました。悲惨な所で亡くなりはしましたが、天国に招き入れられたのです。

イエス様がマタイの福音書で述べられた**「滅びの道」→（マタイ７・13）、「ゲヘナ」→（5・29、30）、「永遠の火」→（18・8）**、また、**黙示録で「火の池」→（20・10、15）**と記された、恐ろしい「地獄」から逃れる道を、私たちは持っていません。また、恐怖と苦痛が永遠に続く場所「地獄」を、訪れてこの目で見ることもできません。

しかし、「天国」もまた、永遠にわたって続きます。
そして、その「天国」こそ、神様が私たちを連れて行きたい、と願っておられる所です。
ですからぜひ、あなたも天国に招き入れていただきなさい。
主の名を呼び求めて、天国への予約をなさってください。

ある講演会のあと、一人の女性が私のところに来ました。彼女はとても動揺しているようでした。
「一体どうすれば、天国を予約できるのですか？ 予約と言われると、なんだか旅行会社みたいですけど」。
私は答えました。「その通り。どこであろうと、予約しなければ、行きたいところに行けないでしょう？あなたがハワイに行きたいなら、航空

ある外国人キリスト者から—

どうしたら天国にいけるのか？

券を予約しなければね」。
彼女は言いました。「その切符を手に入れるためには、支払いが必要ですよね」。
「そうです」と私。
「天国への切符も当然支払われなければなりません。しかし、その切符はあまりにも高価で、誰一人その代金を払うことはできません。私たちの「罪」が、天国行きを妨げてしまうのです。神様は、天国では罪の存在をお許しになりません。もしあなたが、天国で神様と永遠に過ごしたいのなら、まず「罪」を赦され、救われる必要があります。そして、この「罪」を赦してくださるお方は、罪とは完全に無縁のお方以外にありません。そのお方こそ、イエス・キリストです。イエス様こそは、あなたが天国に行けるために、あなたに替わって代価を支払うことのできる唯一のお方です。事実、イエス様は十字架の上で、ご自身の血潮によって代価を支払ってくださったのですよ」。

天国に行くために、私たちはいったい何をすればいいのでしょうか。
神様は私たち全員を天国に招いておられます。聖書の中には、私たちが神様の招きを受け入れるように促している箇所が、たくさんあります。

努力して狭い門からはいりなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろうとしても、はいれなくなる人が多いのですから。
（ルカ13・24）

悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。
（マタイ4・17）

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。（マタイ7・13, 14）

永遠のいのちを獲得しなさい。
（1テモテ6・12）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
（使徒16・31）

これらはみな、神様からの招きの、深く心に響く言葉です。この招きに込められた神様の真剣で暖かい気持ちを、あなたは感じるはずです。今、私たちがするべきことは、次のように祈って、この招きを受け入れることではないでしょうか。

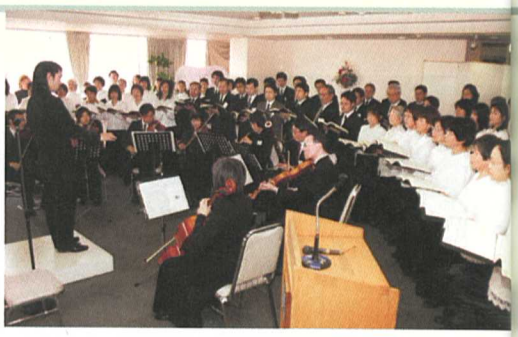
「主イエス様。
あなたを通してでなければ、天国に行けないことを知ることができました。
いつの日か天国で、イエス様とともに永遠にいたい、と願います。
自分の罪のために、本来は地獄に向かうべき私を、どうか救い出してください。
あなたは私を愛してくださって、私のために十字架の上で死んでくださり、
私が受けなければならない罰の身代わりとなってくださいました。
私の子供のときから現在まで、心で、身体で犯した罪を、あなた様はすべてご存知です。
私が思い出せる罪、
また思い出せないあらゆる過ちをも、あなた様はすべてご存知です。
あなた様の御前に、私のすべてはさらけ出され、知られています。
今のままでは、天国に行ってあなた様と共にいることなど、許されません。
ほんとうに、ごめんなさい。どうか私の罪をお赦しください。
私の人生に直接介入してくださって、私を新しくしてください。
あなた様がご覧になって、
正しくないことを、すべてやめられるようにお助けください。
良い習慣を身につけられるようにお助けください。
あなた様が語られた御言葉である聖書を、理解できるように、助けてください。
あなた様が私に語ってくださることをすべて、理解できますように。
みこころにかなう、従順な心を私にお与えください。
私は、あなた様についていきたいのです。
私の人生のあらゆる局面で、私の進むべき道をお教えください。
あなた様は、私の祈りをいつも聞いていてくださいますから感謝します。
神様の子供とされていること、天国であなた様と共に永遠にいられることを、感謝します。アーメン。」

Prof.Dr.Werner Gitt



Information Box
［インフォメーション・ボックス］

福岡よろこびの集いで歌声に包まれた13人の合同記念会



天国に召された13人の方々の合同記念会が2007年2月3日午後、福岡よろこびの集いで行われました。記念会には約60人の遺族の方々が列席、聖書のメッセージや、7人の親族が語る「平安のうちに死を迎えた故人の信仰の証し」に耳を傾けていました。また、その前後には、キリスト集会合唱団有志がヘンデル作曲「メサイア」の4番、12番、44番（ハレルヤ・コーラス）と53番（アーメン・コーラス）を歌い、中西規夫、和世子ご夫妻の2重唱も添えられて、厳かで明るい「コンサート付き記念会」となりました。

震災の地、山古志村で2回の集い



3年前の中越地震で被害を受けた新潟県山古志村で今年（2007年）、キリスト集会の集いが2回開かれました。5月24、25日と6月30、7月1日の、それぞれ2日間で、地震直後に集会の有志の方々がお見舞いと福音伝道をかねて訪れて以来のことです。5月の集いには吉祥寺集会から50人以上が参加、ベックさんの聖書のメッセージや、中西和世子さんと、織田史彦、仁子ご夫妻による賛美の歌、さらに目の不自由な地元の方、中野三枝子さんが洗礼を受けたこともあって、会場の五十嵐久代さん宅は大きな喜びに包まれました。また7月1日には、新潟集会の日曜礼拝が、初めて場所を山古志村に移して行われました。その折、村の方々から「11月には農閑期なので、こんどは私たちが御代田に行きたい」という声が聞かれました。

神の光の中、長男は自立に向かって歩み始めました

——不登校児の母親からの手紙（要旨）——

長男は小学校から高校（定時制）まで、いじめを受け続けてきました。「おまえの存在が、行動がむかつくんだよ！」という、たったそれだけの理由からです。いじめの恐怖、不安によるチック症状、不眠、引きこもり。そんな長男を見て私はただ悲しくて、泣いてばかりいました。母親として息子を守ってあげられない無力感、罪悪感などで心はズタズタでした。

私は心をふるい立たせ、学校の先生、カウンセラー、校長先生、教育委員会、文部省、警察その他、あらゆる機関に相談しましたが、問題は解決しませんでした。今、思うと、それも当然で、問題の根は、いじめに駆り立てる心、心の中の「悪意」にあるからです。システムや環境など、外部の状況を改善しても、根本的な解決は望めません。いじめている当人が、自分の行ないの過ち（罪）に気づくことが必要ですし、罪の性質は生まれながらの人間すべてが持っています。

解決の道は別のところにありました。苦悩の中で出会ったイエス様です。イエス様は何でもおできになる神であり、人の心にも働いてくださいます。十字架の御業で、私たちの罪を洗い清めてくださいます。いつも共にいて守ってくださいます。このお方を信じ受け入れた時、暗いトンネルを抜けることができました。私の中にあった自殺願望、絶望感が消え、神の力によって、いじめに勝利することができました。聖書のみことばが心に響き、希望と平安が与えられました。

わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、「生きよ」と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、「生きよ」と言った。（エゼキエル　16・6）

わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。−神である主の御告げ。−−わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。（エゼキエル　34・15、16）

長男は20歳でやっと高校を卒業、職業準備訓練などを経て、準社員としてではありますが就職することができました。神の光の中で、自立に向かって歩み始めています。

最後に、長男への思いを綴らせていただきます。

長男へ。そのままのあなたでいいんだよ。あなたは望まれて生まれてきたんだよ。あなたは神の目には高価で尊い存在なんだよ。私の目にも、この地上に一人しかいない、かけがえのない存在、素敵なナイトです。神に守られ、愛されている、そんなあなたを見るのが私の喜びであり感謝なのです。　ハレルヤ！



こちら松山集会で～す from MATUYAMA

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。
（1テサロニケ　5・16～18）

松山集会は1996年4月におこされ、12年目を迎えました。それまでの歩みを振り返りますと、愛媛県にキリスト集会の種が蒔かれたのは1980年、東京から西条に移り住まわれたご夫妻によってでした。その後、しばらくの間は集会の場所が定まらず、不定期に家庭集会を開いたり、高知から松山に転勤して来られたご夫妻のお宅で礼拝を行っていた時期もあります。しかし、その礼拝もご夫妻の転勤でできなくなり、香川県坂出まで片道3時間の道を礼拝に通ったこともありました。そのような時に、多くの方々の祈りに支えられて松山集会はおこされました。主は15年もの間、私たちの歩みを見守り、育んでいてくださったのです。

松山での日曜礼拝・福音集会は、個人の住宅を用いてのスタートでしたが、2年前から愛媛県総合福祉会館で行っています。松山市内のほか西条、今治、久方、美川など、車で60分～90分かかる広い地域から、主に導かれた方々が集まってきます。

日曜日の礼拝・福音集会以外には、次のような活動を行っています。

●西条で月に1～2回、土曜の夜にメッセンジャー（聖書のメッセージを語ってくださる方）を迎えて福音集会を開きます。

●松山で毎週土曜日の午後、聖書輪読会を行って6年目になります。並行してベックさんの著書「絶えず祈れ」「神の愛」「すぐに起こるはずのこと」を繰り返し読み続けています。会はひとりひとりの祈りで終わります。

●男性の祈り会を日曜日の礼拝・福音集会の後、集会場で行います。

●女性の祈り会は水曜日に、今治、松山、西条、久方と、毎回場所を変えて行っています。

●日曜礼拝・福音集会の後は、場所を家庭に移し、メッセンジャーの帰られる午後3時過ぎまで、語り合いの時をもちます。

●よろこびの集いも、これまで数回開きました。

●時には気分を変えて、山や船上で礼拝や集会を行うこともあります。いろいろな人が集いやすいように、と考えての試みです。

小さな松山集会ですが、集っている人の中で男性が比較的多いこと、医療従事者が多いことが特徴です。女性の方々は明るく、にぎやかで、一にも祈り、二にも祈り、三にも祈りの姿勢が感じられます。集会場は定員28名の円卓会議室ですが、近頃は20名を超える日もあります。「松山は四国で一番大きな町なのだから、苦しんでいる人、イエス様を必要としている人もたくさんいるでしょう…」というベックさんの言葉で始まった松山集会に、一人でも多くの方が導かれますよう、お祈りください。

（光藤　英彦）

11/4
山崎 貴哉・由紀子



11/11 新貝 安浩・江里





11/18
佐藤 章・晶子

何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。
愛は多くの罪をおおうからです。 (Ⅰペテロ 4･8)



7/21 小松 一成・美佳

6/23 中永 浩至・ハンナ





5/3 和田 宗勝・円佳



11/19
納谷 勇二・由紀子



12/9
高田 英樹・里奈江

結婚式
Wedding



4/28 岡村 崇志・佳奈

4/14 林 欣寛・直子





4/14
齋藤 貴成・裕子

結婚式と葬儀のご報告

葬儀
Funeral



2006年
11/01 松本 頼幸
11/08 丹川 富次郎
11/09 堀内 肇
12/02 西尾 ユキヱ
12/18 長谷川 浩一













2007年
1/20 宮崎 靖一
1/21 松見 イク
1/25 高田 かめよ
1/29 上野 哲
2/01 廣居 淑子
2/07 本多 作次
2/09 都丸 千代
2/23 遠藤 武之
3/06 山田 秀一
3/17 宮岸 清彦
3/20 原 好則
4/01 須崎 和子
4/10 片瀬 とき















5/20 平島 弘雄
5/22 北田 昌剋
5/22 田中 武
5/28 木村 宏子
6/04 堀部 勇二
6/12 菊地 美恵子
7/19 永野 和彦
7/26 中野 ハナ

主が私たちのために死んでくださったのは、
私たちが、目ざめていても、眠っていても、
主とともに生きるためです。 (Ⅰテサロニケ 5･10)